

外奈良某・牧某等弓手將二被召列、鵜戸より内海迄御討入、直二峠之城御取、海陸より折生迫まで御攻

入、於曾祢山御陣御越年、翌卅一年辰正月月中旬加江

田城御攻圍、城之大將伊東安芸飢肥氏に相付乞和降

を候へ共、其以前穆佐城を奉侵候御怨根被為解かた

く、是非以御攻殺可被遊御返事二候処、安芸城兵引

列、其比祐安被致居城都於郡之様へ遁落候而、其儘

加江田城ハ此御方より御乗取被遊、前文之両所二見

得候通、義天様御事、日州二可御座(有脱力)と御議定も為被

遊置故二も候哉、御居城二御取構、無程御成就被為

在、大岳様其外諸軍勢ハ御帰シ被遊候由、其砌之

事聖栄ハ如左被書置候、敵城加江田を受取、此間之御

遺根なれハ、伊東退治之始とて御座(所脱力)として(屋形も脱力)を如此為申

と見得申候、松輪様飯野(例力)是二より河南・河北・加江田佳

城等(衆力)今御座所と申由也

列成へしと万人のいさみ此事二候、城誘出来次第二

陣取ハ返シ可申と上意二而候間、夜もなく誘候得ハ

道行事程もなし、御暇給被帰候、自身一家・御内・

国事国事国替二定候、御屋形替加江田二御座候而、
貴久二御替候と云々(按二後二忠国と御改名之、前文内々御物語候、薩州二八又三郎御差置、存忠者日)

州可有御座と云事ならん、且又暫御座候而ハ此年冬より御病氣二而、
翌年正月御逝去候へハ、誠二二年も不被成御座候故、暫と被書置
候、又其比菊地重朝より新納近江守実久を便り、立

田某と申者使差上候事有之、其年之夏二も候歟、於

志布志宝満寺光明院 義天様御对面被為在、段々水

練・川狩・御舟遊等被為催候事も有之、其比ハ

大岳様被成御座候筋二も相見得、又同比大方家より(大友力)

使僧差上候事も有之、是又聖栄被書置候ハ、其時分

大友殿一寺之長老分下り候、伊東大和守何方の媒不

知、御見参之由二而加江田被参候、存忠ハ御出候ハ

て又三郎殿彼兩人二対面候ひし、志布志二被居候御

内若衆参宮被申候、左様被成候へハ、山東ハ以後ハ

不知、先ハ無事二候(後廿年余文安二年祐禿穆佐之城攻落とあ書置、其比ハ伊東領二、就是も此方御了簡ハ猶々御座有

故、先ハと被書候也

けると承候、其後ハ屋形御上洛之御營連々老名二御

談合候処、御年も千秋万歳御座候而御年五拾壹、正

月廿一日御遷化候畢と被記置候、又応永記二ハ、同

卅一年甲辰匠作(修理亮之唐名也、義天様御事也)山東二取向キ給ひ、加

江田城之後二雖有刀一者守護之權威、一ツハ三ヶ

国ノ勇力、争か伊東も可叶、彼城も没落畢、

屋形仰けるハ、山東退治ハ可輒、此十ヶ年之間依国

ノ制罪征伐之誤面々之辛勞非一、今カヶ年ハ可有二休足、皆

有_二御帰_一也、冬之比より匠比御風氣と聞得候か、次

第二重く成給ひて不及祈禱・醫師云々、今度之御病

氣平癒と申せ共不叶と、同三十二年乙巳正月廿一日

義天様年五十一と云々、三尺之劍光、一張之弓勢二

被押、三ヶ国二狭_二野心_一二人差頸二ハ無けり、然聞

御一期貴久二相統云々相見得、且右御逝去之歳より

廿一年目、大岳様御代文安二年丑九月八日伊東大

和守祐堯祐安之孫穆佐攻落候趣伊東系凶二有之、旁参考

仕候得ハ、義天様御事、御家督被為繼候後も前文

通薩州二ハ大岳様被為差置、御自身様者日州二被

成御座向_二御儀定被遊置候事、山田聖栄兩所迄慥二

為被書置事二而、同三十年十二月比より日州二御討

入、同三十一年正月月中旬加江田城被攻取候時分、山

東御退治之始_二御佳列能被為入御手_一候故、直二此

城を御居城に御取構被遊度諸軍衆へ早々御普請出精

可仕、左候而、成就仕候上ハ則皆御暇可被下旨被

仰出、何れも昼夜共相働別而埒明、無程御普請相濟、

諸軍勢ハ御暇被下候而、御一家衆・御内者・国方等

移替被 仰出、御自身様御事ハ直二加江田城二被

成御座、其後何方御移も前文通聖栄不被書置、伊東

大和守と和談之媒も相見得、御上洛之御企等被為在

央二御病死之筋被書置、同事を又応永記二ハ、面々

皆御帰しあり、其冬より御風氣被為煩候而次第二被

為差重、翌三拾貳年巳正月廿一日御逝去と相見得、

於何方と申詞ハ無御座候得共、聖栄自記・応永記互

之詳略考合見候得ハ、於加江田城御逝去為被遊二ハ

無御座候哉、左候而、穆佐之地ハ其以前最早十年内

外為被成御座地二而御座候上、右通前年加江田御座

所と被相定、山東も先思召通無事二被為治付候折柄

二相当り候間、穆佐も一統_二伊東_一より御取返御座候

事を、河南・河北も加江田之佳例成へしと万人勇此

事二候と書置御座候半、左候而、悟性寺之儀ハ鐘之

銘二掘候へハ、義天様最初穆佐江被為移候比より

大概廿年計以前、永徳元酉年伊東駿河守祐滿と申人

開基之寺二而、其時之開山長徳得寿命候僧二も御座

候て、直二開山次代_二御居城_一為被遊尺分二而、御逝

去之時迄存命如何候半哉、旁何分二も 御葬送等ハ

於悟性寺被為執行候而、御法号 義天之二字御彫刻

二而、御石塔も被為立置御座候筋二ハ無御座候哉、

穆佐院三百丁ハ諸県郡二而、加江田八拾丁ハ宮崎郡

と岡田帳二相見得、道程如何有之候哉、伊東系図無

誤物候ハ、其以後猶廿年計ハ 大岳様御領内二而、

如何様薩隅日国一揆蜂起之御取乱二も候哉、文安二

年九月より伊東祐堯押領二而、祐堯曾孫之伊東義祐

代相成、天正五丑十二月佐土原城没落之比迄百三十

三年計ハ押領被仕居、段々此御方江御敵对被申上砌、

伊東氏臣下之者義祐を諫為申詞二、御先祖祐安御代

二ハ島津殿御躰(二被カ)為取、于今穆佐之寺二 義天二字

ある石塔も御座候と古証を引為諫趣、 龍伯様御躰(義心)

中二被載置御座候哉二承伝申事候、然処右之御石塔

寛文十年戌四月悟性寺住持伝説(悦カ)と申僧修補之願申出

候節迄ハ現在立居候事、左之通明証御座候文政二卯二

村高輔写置候而路頭之話と外頭、
仕候一小冊二見当り写取置候

高三斛

一客殿横三間三尺 礎板敷二方縁 但、茅葺

一茶堂横六間三尺 礎板敷壹間縁 但、茅葺

右家式ツ近年木虫相付破損申候、

一庫裡横七間 堀立、かやふき

一門横貳間 礎 但、かやふき

右古家損申候、

一葉師堂横三間 礎 但、茅葺

一右古堂横五尺 鎮守 礎 但、板葺

一天神宮横三尺 一拝殿横貳間三尺 堀立 但、茅葺

右拝殿葺替、

右者御先祖 義天様之御寺二而、先年七堂伽藍之由

候処炎上仕、寺中家数皆焼亡申候而縁記・文書等相

廃り、于今義天様之御石塔壹ツ御座候已耳、外二別

二何ぞ訴詔可申上行も無御座候故、二三代庵迄二而

為勤来よし申伝候、然処天叔と申防主代古跡之靈地

二而御座候、殊二日州境目之所二御座候へハ、自他

家之外聞不可然由二而、右之屋敷六ツ建立仕召置候

差出

菩提所
悟性寺

處、近年木虫相付、右家式ツハ破損申候、余ハ古家・古堂二而、皆修補前二罷成候得共、当分諸旦那困窮仕自力難及候間、公儀江被仰上、修補御心付成被下候様御申奉頼候、以上、

寛文十年戊四月五日 悟性寺 印

御暖衆中

御横目衆中

右之趣相違無御座候条、御心付を以修補御座候様二

公儀江被仰上可被下候、以上、

戊四月十二日 横目三人

暖三人

伊集院宮内少殿

右被申出趣承届、無別条候間被仰上可被下候、吾等^(修補脱力)

地頭所之故如斯御座候、以上、

戊四月十三日 伊集院宮内^(忠鎮)

寺社御奉行所

穆佐菩提所悟性寺客殿修補之儀申出候、依之為御合力銀五枚遣し候間、堅固ニ修治之様ニ可申渡候、此外茶堂・庫裡・葉師堂ハ所より之差出ニ者有之候得共、規模逃ニ而候、天満宮ハ寺社帳ニも無之候、尤、義天様御寺と被書出候得共、左様成証文無之ニ付規模帳被相除候間、其段可被申渡候、以上、

寛文十年戊四月十九日 寺社奉行所 印

穆佐地頭
伊集院宮内殿

右寺修補之訴訟住持伝祝鹿兒島へ參上ニ而相達、^(惚力)

右書出地頭迄參候写置、本書悟性寺へ遣也、使黒^(朱書)

木舍人、

右書出ニ而考候得者、其時分迄 義天二字ある御石塔堅固ニ寺内へ建居為申儀、決而相違有御座間敷訊ハ、伊集院宮内少忠鎮事、寛文六年七月四日穆佐地頭被仰付、同十一月八日より穆佐江移居、貞享四年^卯三月迄式拾弍年為相勤人之由候へハ、右之訴訟申出候時分ハ宮内少被引移五年めニ而、現在寺内ニ御石塔有之候事共平日能々存知之上、右通繼書を以

為被申出二而、余程明証差知候得共、右様四月十三日致繼書住持江被相渡、其より大抵三日路二も住持鹿兒島へ令持參、同十六七日比二も寺社方へ差出候半、扱寺社方之儀者寛文六年八月初而為被召立御座之由二而、夫より僅五ヶ年目、時之奉行者島津出雲久行評定所詰より兼務之時分二相当り、右訴訟書差出候而より纔二三四日目二当而同十九日、久行直二為被申渡日數二而考合候得者、其節ハ決而為差御糺も無之故、

義天様御寺と申証文無之由、御規模帳被召除候旨被仰渡候筋二相見得居、若其節得と被及御糺方候ハ、龍伯様御譜中二被戴置候趣二も符合仕、屹と御取持も可有之向二成立、御石塔茂末代迄嚴重二相伝り可申候処、乍恐畢竟其節御糺方不被為行届、右様纔三四日之内二御規模帳被召除候旨被仰渡候故、其以後住持共力を失ひ、御石塔拝掃等之勤行自然と疎略成行為申筋二ハ無御座候哉、其以前右之寺地百三拾余年敵領二相成居候時さへ、代々 義天御墓と申伝不及廢布相伝来候処、右之訴訟御取揚無之故よりの事

候哉、寛文十戌年より安永三年迄年數百五ヶ年之間、終二ハ御石塔何方二も倒込候か埋沈か仕、頓と見失候様為成哉二被相考、遺憾至極二奉存事二候、左候へハ、現在百年前迄ハ髓二立居為申事ハ右通訴訟書二明白見得候間、所中古老之者共右御石塔為有之場所共能覺居候者共より申伝候事二御座候半或人よ御石塔為有之と申伝候跡二ハ、所之郷土共より毎年、盆二龜垣仕替、花筒相手向、殿塚と唱候よしなり、左候処私実祖父本田新右衛門其外吉田周右衛門・安藤左平次杯御記録奉行勤之節、谷山慈眼寺并同所喫共より島津様森又ハ存忠庵・存長院杯申伝候事共二付何と歟

為申由、右之奉行達段々為被相糺事為有之と歟、乍不束覺候事有之右之節何様御沙汰御座候半も不存候へ共、島津丁計二有之、由緒不詳由、慈眼寺ハ下福元村二有之、義天存忠様・森山妙久様御夫婦御牌御安置有之、其由緒ハ応永年間義天様當寺觀(威力)音堂二御參詣御願被為在候処、靈感思召之通二有之候由二而、水田御寄付二而御再興被仰付、其比住僧江御意候ハ、觀音信仰被遊候間御万歳之後者御位牌立置候様二と御願被置候趣有之、御逝去以後奉安置候由、後世住持、大中様御參詣之節御咄申上候ハ、我様二も其通被遊御意候由、然共、大中様御牌ハ不被遊御座旨、慶安三年九月十七日慈眼寺書付江有之、存長院杯申事ハ、上福元村葉師堂格(二カ)護仕候山伏是枝慶花坊と申者、龍伯様江於此堂天鍵之御伝受仕、其孫二存之字御免二而、存長坊と名為被下趣共元禄十二卯三月是枝

焉爾、由是觀之、義天公塚在_二悟性寺_一云者亦不_レ為_レ無_レ謂矣、然今日之所_レ得者(損脱)宰_二嗣_一、既已鞠為_二草莽_一、丘墟_一、而殘碑斷碣、片言隻字、無_レ復存_二乎其間_一焉、
者_上也、雖_レ謂_三或得_二其処_一、然將何以_レ為_二之驗_一乎哉、
姑書_二其事于石_一詔_二觀者_一而使_レ有_二以考_レ焉云爾、

安永六年歲次丁酉霜月二十一日

本府大史川上親敷謹譯

右様被相立、其砌より御位牌等屹と御安置被遊、追々御仏餉米も(二)斛脱被召付、諸事御廟所御同様之御取持二被仰付候由、今更私式石之碑文拜読仕候処、前件寛文十戌年迄現在、御石塔相立居、其事のミ証拠二申立候、住僧伝(悦)説訴訟書之事全相洩居、不審之至御座候、右川上・東郷両史差入之節、前文訴訟書差出為受吟味事候哉、両史篤と被致一覽候ハ、片言殘碑の証拠無之、或所謂仏寺トハ疑指_二悟性寺_一不及被疑筭哉、二被考申事候得共、只按旧記ト有之、毛頭寛文十年住持より于今、義天様之御石塔一ツ御座候計を証拠として訴出候一件、碑文ニ無御座事遺憾之至御座候、

今更愚按ニ而奉考候へハ、(義)龍伯様御譜中ニ有之義天之二字ある、御石塔、則寛文十年悟性寺住持伝説(悦)より右様申出候御石塔と同物ニ可有御座と被相考、

其後前件之成行ニ而、御石塔何方ニ而埋廢候半、然共安永初迄僅か百年計の間ニ御石塔無之様為相成筋二候間、(旧記雜録拾遺伊地知季安著作史料集八より補)其場所者古考共申伝有之、△其所を堀付、

右次第二付而ハ一只も無_二足_一徵者一と被記置候分ニ而ハ何分ニも残多、縦令難被定迎も(究)寛文十年迄現在為立居証拠ニハ、右之訴訟書さへ無疑物候へハ、

随分足_レ徵者と申ても不苦筋二者無御座哉、尤、住僧為申出計の書付ニ而ハ念遺敷共可申、五ヶ年移居候地頭伊十院(忠)宮内承届、無別儀と為申出上ハ頓と龍伯様御譜中ニ被載置候趣と符合仕居候筋二者無御

座哉、左候へハ疑指_二悟性寺_一と被記置候、疑字二者不及候而、余程古来之申伝有謂筋ニハ無御座哉、殊更、義天様御事、御舍弟様ニ而被為入候内より山東

為押穆佐高城ニ数年被遊御座、御家督被遊候以後迎も薩隅諸所之逆徒大抵御討鎮被遊、薩州方ニ御心遣無之様被為治付候上ハ、薩摩へ者、大岳様御差置、

御自身様二者山東御退治候而日州二可被成御座筈二

御思案且御儀定為被遊事、山田聖榮兩所二迄ハ被書

置候事共、旁前文旧記之通候得ハ、十二九迄ハ日州

加江田の城二而御逝去哉二愚按被仕、重々私式世上

誤勝之旧記等二而如何考候事、何共不成合至極、聊

も可書述事二無御座候得とも、適此度穆佐江御差入

二付分而預御尋趣有之、先年以来右之寛文中悟性寺

申出候旨とハ御碑文合兼候事ハ相疑罷在、且他領境

二格別成御石塔在、先之寺さへ不知向之石碑ハ存共

御外聞二も相掛、無此上も氣之毒と末川周山殿御咄

も承居候、旁二付任御尋愚存無腹臆如此書綴、猶不

束且浅見二而決て誤耳可有御座ハ、乍案中万一御考

之端二も相成事於有之ハ欣幸此事二奉存、如此二御

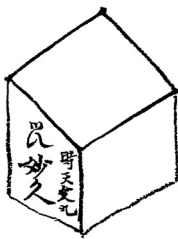
座候、以上、

天保七年申十二月

汾陽次郎右衛門様

伊地知(季安)小十郎

穆佐上倉永村之内吉祥寺
磨寺跡阿弥陀堂より巳午
ノ方間計ノ所ニ櫻ノ下転



居候古石塔其字并妙久ノ
二字ハ彫刻有之、年号ノ
ハ墨書二而、四字ノ分相
知申候得共、以後書記為
申体相見得申候、

十九日 少雨、霽、曇、病人同変、

一朝六ツ時起、八ツ前より町田家江参り、今晚夜起、

翌朝六ツ過帰宅、

一二王堂馬場伊藤家御ば様今宵時鳥鳴しにより歌よめ
とありければ、言葉のしたより筆をとりて、

おき明す人の心やなげくらん

闇の軒端に鳴ほとゝきす

二十日 曇、晴、小雨、同変、

一朝六ツ前起、町田家より六ツ半帰宅、八ツ過より

又々町田家江参り、今晚泊る、八ツ時分臥候也、

一暮かゝる比縁ばたより虫の音を聞て、

おひしける蓬か門の虫の音を

聞ハ淋しきたそかれの比

夏草

五月雨のふりつゝきなる庭の面ハ

猶夏草のやまとしけれ

夏草(朱書「マ、」のしけひあひぬる我宿を

野へとやみらん岡へとやミン

一有人教幼子曰、檢臣事、君(朱書「マ、」にに我を捨苦勞をかへり

みされ、自然と忠の道にいたる也、父母につかふる

事ハ心(朱書「マ、」の及ひいたわり如何様之儀あるとても、少も

さハかぬやうに常に尊ふ事を忘へからず、縦世上孝

行なるといはるゝも、其親の子を思ふ半分二も及へ

からず、増てや平生の心持二而ハ不孝之儀眼前也、

次に朋友之事、誠を以交稀にも侮へからず、諸人を

軽く思ふ事なかれ、芸能なきとても我より年老たる

人をないかしろにすへからず、尤、貴人を敬へし、

さて我身の嗜ハ其分量を不忘、道理を正し、如何様

取はやすとも不義を曲て成へからず、縦初にも能一

言を聞なは深く胸中に納置、以来身を立長々奉公之

志肝要也、世上見るに、我こそ物馴たる顔付にて人

を直下に思ひ出過たる諸人、上面は能様にあるとい

へとも、内には憤を含むや、是無礼之根本也、如此

人は必追徒(從之)売僧を宗として、他人の機を見心中にお

もハぬ事をいふもの也、身震して忌へし、嫌へし、

飲酒の所へ行奢の心出来、後には先祖より伝来し知

行を捨及餽命也、惣して行跡乱るゝハ大酒故と知へ

し、又若年之時分に勤されは難成事共有、少ハ形を

付へし、年長悔共詮立まし、盤上尊し揃白髪隠居の

翫や心を寄る事なかれ、其外人言を以月日を送るは

世間並也、よき人替らぬやうに似たれとも、謗に逢

殊に赤面におもふ事多かるへし、是又一ツ口惜次第

也、色の道ハ身命を捨るも覚えず、君親を忘るゝ例

古今多し、第一可戒事や、召仕之下人彼も人子なれ

は、親として子をおもふは上下へたてなし、心を添

らるへし、其条の事は是に隨而相考、少しも懈怠あ

るへからずとぞ、

二十一日 曇、小雨、夜二入雨、病人同変、

一朝六ツ前起、六ツ過戸柱より帰宅、直二加藤権兵衛

殿へ参る、五ツ時帰宅、七ツ前より戸柱へ参る、夜

ル七ツ時分臥シ、大鐘過起、六ツ過臥し、六ツ半時

分起、直二戸柱より帰宅、

ば、様御病氣同断之内落目也、

廿二日 曇、小雨、

一朝六ツ半起、直二戸柱より帰宅、七ツ時より参候而、
夜九ツ時分臥シ、翌朝帰宅、病人同変、

廿六日 雨、

一夕へより夜起、朝六ツ過帰、四ツ過より父上様御同
道二而戸柱へ参る、九ツ半時分臥候、御病氣同変、

廿三日 曇、晴、

一朝六ツ時起、日入帰、岩山玄璞殿へ参、葉貫〔朱書マ、ハ〕候得ハ、
些腹痛故、

廿七日 雨、夜二入烈風、

一曉大鐘過起、五ツ前戸柱より帰宅、八ツ後より又々
町田家へ参り、夜起、暮より至而御模様悪敷、夜大
鐘より至極之御勞見、葉も不通、

八ツ時より又々戸柱江参り、暮過帰宅、四ツ前臥候
事、戸柱病人同変、

廿八日 晴後雨、

廿四日 霽、
一朝六ツ過起、八ツ後より戸柱へ参り、日入時分帰宅、
御ば、様御病氣同変、八ツ後より荒田御姉様御出、
夜四ツ前御帰、四ツ半臥候事、

一夕へより夜起、六ツ半時分浄林院様御病氣御養生不
被為叶、暮前御入館有之、〔箱力〕夜四ツ半帰宅、九ツ過臥
候事、

廿九日 雨、夜二入晴、

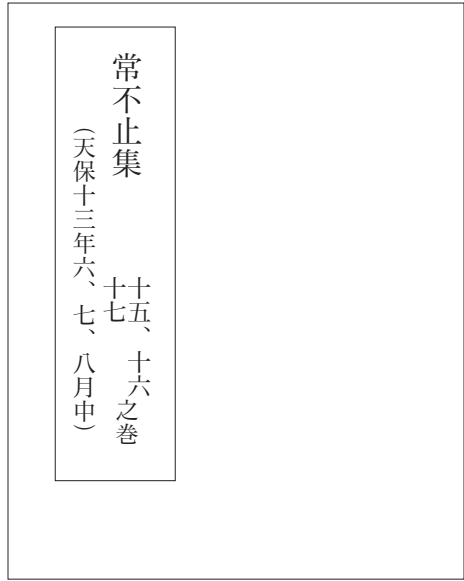
廿五日 曇、
一朝六ツ時起、四ツ時より戸柱へ参る、今晚夜起、御

一朝五ツ時起、八ツ後より戸柱へ参、暮六ツ時浄林院
様御出館見送、〔箱力〕福昌寺へ参る、御位牌者郷十郎殿被

持、父上様二も御葬衣被召六道御廻り被遊候、父上
様二者未四才之御時之御繼母二而、七才未滿故五十
日之御忌御受被遊候、拙者二も三拾日之服忌也、五
ツ半時分御葬式相済、御墓所迄も参り、四ツ時分又々
戸柱へ参り、九ツ時分帰宅、九ツ半時分臥候也、

名越篤烈

常不止集十四之卷終



一 高島四郎太夫へ鉄炮指南一件二付仰渡
 一 谷山純香桃源和歌拔書

常不止集^{十五}_{十六}之卷^{十七}

常不止集第十五之卷

天保十三年壬寅六月中 名越篤烈

朔日 雨天、忌中、

一朝六ツ過起、大鐘過御墓参詣、花舜軒・石心院へも
 参、夫より戸柱町田家へも参り、暮前帰宅、九ツ時
 臥ス、

二日 雨天、忌中、

一朝六ツ過、^(起服之)九ツ時臥候事、

三日 雨天、忌中、

一朝六ツ前起、五ツ時分より石心院・花舜軒へ参り候
 而、夫より御墓へ参る、戸柱御墓へも参、四ツ前帰

一 溪山公鎌倉御参詣御道之記

一 慶元記拔書

一 谷山中塩屋善右衛門躰養子源左衛門妻へ御褒美米四石
 被下候御書付写

一 足輕上村権之進琉球登り海賊二逢候漸之覚

一 矢部駿河守御赦二付詠歌

一 公義御通達

宅、夜八ツ半時分臥候事、

霽、忌中、

一四日朝六ツ過起、暮より父上様御方へ藤島孫左衛門殿入來、拙者二も九ツ時分迄罷出居候、直二臥候也、

五日 霽、夜二入雨、忌中、

一朝六ツ過起、大鐘前父上様御同道二而戸柱御墓參詣、石心院御位牌江も參詣、夫より戸柱町田家へ参り、日入時分帰宅、夜入父上様御方へ罷出候へハ、郷十郎殿・万次郎殿小僕・仲太夫殿・直八様・三原七郎右衛門殿・藤島孫左衛門殿・松岡喜左衛門殿入來、九ツ半時分各々被帰、夫より御暇、八ツ過臥候也、

六日 朝小雨ばら／＼、忌中、

一朝六ツ前起、伊藤万次郎殿六ツ前弓射之約束二付射場へ張出し、忝人二而弓射方いたし居候処、六ツ過より福留吉左衛門弓出張、式拾建射候而取止居候処、五ツ過之時分万次郎殿入來、夫より兩人二而三拾建

射候、八ツ時より郷十郎殿入來、直二囲碁、大鐘より郷十郎殿・吉左衛門・野夫三人二て三拾建射、日入時分御ば、様落し入被遊候付、皆々弓取止參候様被仰候間、夫より取止候、暮より父上様御方へ罷出候処、藤島孫左衛門殿・相良市之進殿被罷出候、九ツ過各々被帰候、郷十郎殿二者昼より居続き、市之進殿些早日被帰候、八ツ前臥候也、先日より戸柱御ば、様長々御病氣、御死去後八日目三拾式三日振弓射候也、

七日 大霽、忌中、

朝六ツ過起、七ツ時より戸柱御墓へ參詣、石心院へも同断、大鐘前帰宿、直二直八様と兩人二而暮迄弓五拾五建射る、七本ならし也、夫より父上様御方へ罷出候得者、伊藤万次郎殿・同人母^{おのり}・直八様御出、九ツ過各々御帰り、八ツ時臥候也、

八日 晴天、
霽^晴、拙者今日之弓立、

一朝六ツ時起弓、御免二而今日より出勤、八ツ後退城、

七ツ後より伊藤万次郎殿・町田郷十郎殿拙者舎弟ナリ・福留

吉左衛門・村田市郎左衛門二人唐代之家来二而弓六拾建射る、

六本ならしに三本越也、暮より父上様御方へ罷出候

得者、藤島孫左衛門殿・松岡喜左衛門殿・お梅殿八野呂覺左衛門殿妻

被罷出、各々九ツ前被帰候、八ツ前臥候事、

忌中未也、

鎌倉御参詣御道之記

溪山公

鎌倉御参詣御道之記

ことしはたらちをの八十七歳にならせ給ふ、公の御

台所所に御つゝきもあれは、ことし天保ふたつのと

しむ月の中の九日 公より命し玉ひて永く国務をつ

とめ給ひ、また高き御としにも及はせ給ひ、御つゝ

きもあれはとて従三位にすゝませ給ふ、露の御恵の

置所もなくよろこはせ給ふこと限なし、此御よろこ

ひを鎌倉の高祖の御神靈に告て謝し玉ハんと思召し

たゝせ給ひぬれと、高き御としなれは其事も叶ハせ

給わず、やつかれにかはりゆきて、謝し申せと命し

給ひぬれは、 公にいとまを乞て卯月の中の六日に

白金の館を立出て、

たらちをのかはりに出る旅なれば

けさの心の猶勇ミぬる

品川の釜屋てふに休ミければ、人々送りて来りつと

ひぬれは、(朱恵)マ觸いたしてしはしミきすゝめぬ、こゝを

いて、川崎にいたれハ又人々爰にも来りぬ、申の刻

過に神名川に著て草の枕を結ふ、

十七日、けふは道の程遠ければ卯の刻過る比立出て、

海上を見れば朝日出たれ、

そら晴て風静なる波間より

出る朝日のかげ匂ふなり

程ヶ谷・戸塚を過て藤沢山富士見の亭より遙にふし

山を見れば曇りてきたかならず、

うき雲ははれミはれみす老松の

木の間遙にミゆるふしのね

江の島は程も遠ければかちより至りぬ、浜辺に出た

れは雲もやゝはれて中空にふしのねのそひへ、麓に

ハ伊豆の山々連なれる、風光筆も言葉も及かたし、

弁財天に詣て岩窟のあたりをも見、岩本院に泊りぬ、
夜更り雨ふりいて風ははけしく浪の音たかければ、
(朱書「マ、」

雨風にはけしき波の音たて、

かりねの枕夢もむすはす

十八日、雨風はけしく海上の遠望も雲とちて見えす、
雨つゝミして巳の刻はかりに立出、浜辺にいたれハ
雨風のはけしけれハ、しら波の打よする音のミして
みるめおそろしく、七里か浜を過るに見なれぬ海草
の打上てあるを所の人にとひければ、あらめの木と
いふ、とりて帰り人々にもミせんととうせぬ、雨風
は猶やます、

海原ハ八重立雲に空とちて

雨かせはけし沖のしら波

稲村か崎といへる所は海士の家のミにて、何方もせ
まければ輿のまゝかき上てしはし休ミぬ、海士の子
の十式三才なる娘のかまぐらの絵図をさして案内を
しめすとはいへは、呼出て聞に百人一首をよむること
ならず、本のま、からうしてまたはせ村にやすらひぬれば観
世音の堂あり、詣て玉へと人々すゝむれと雨いとふ

ふれはやミぬ、鎌倉の雪のしたといふ所に著て衣服
をあらため、雨つゝミして八幡宮の御社に詣てぬ、

ろふ門の本にてこしより下り、歩行に水たまりぬめ
りて行やすからす、此御社ハさいつ比焼失たりしを
公より造り給ひて、今はあらたなる御社の莊嚴巍々
として目を驚しあへり、御社のうちにハ桐承院出む
かへ先に立て引すゝめ神前に拝礼し、階下を下り広
座に著座すれば、御神宝を持出し拝見すれば、頼朝
公の御調度・まさこの御調度・将軍家より御奉納の
御太刀、其外北条氏直なんと奉納の太刀まで皆美を
尽してミゆ、神前に向ひ奉り心に思ひつゝけるは、
嬉しくも神や受らむたらちをに

かわる此身のけふの詣を

御宮を立出て坂を下り、こしにのりて宿坊桐承院に
立寄り、白旗大明神の御影を拝しけれハ、桐承院御
神酒・御供物なんと取りて我に渡しけれハ、頂戴し
てのち桐承院を問とふらひ、(朱書「マ、」そこを立て高祖の御墓
にふしてぬ、程もあれはまた輿に乗て行に雨かせの
猶やます、御はかの山の上なれハ山下にこしより下

り、坂をのほるに路はけしく行なやめは、人にたす
けられてやふく／＼にたとりて、御墓を拝して心に思
ひけるに、御霊もさそ、

歡ひの心を受むたらちをに

かはりて告る君か恵を

と思ひつゝけて雪の下のやとり草の枕を結ぶ、十
九日、猶雨風やます、雨つゝミして立出、坂を越へ
田路を一里余り行けハ海辺にいたる、雨のやゝやミ
て伊豆の山々は所吹はれたり、三浦葉山村といえる
に休みて、(朱書「マ、」)昼かれい終る比はよくはれ日も出たり、
森戸大明神(朱書「マ、」)の拝礼して、

昔しより仰く恵にとしをへて

神さひ渡る朱の玉かき

浜辺にいて、見れば伊豆の山々浪間につらなり、ふ
しの根遙に見えたり、さし出たる崎よりすこしへ
たゝりて大島海上に浮ふかと見え、煙のたえず空に
立のほりて盆山を見るかことし、浜辺ハ大岩数多有
て白浪の打よする音高く、岩上よりくたけ落る白あ
はの滝のしら糸を乱せるに似たり、左のかた二三丁

も岩のさし出たる崎あり、しら波の打よするみるめ
えもいはんかたなし、

おそろしや岩浪高く打よせて

なも乱けむ滝の白糸

貝からなんと捨て立帰り、又輿にのり出ぬ、もとき
し道をしはし行は田道にかゝり、池子坂とてはけし
き坂路なり、道ぬめりて人々のころひぬるを見て、
サカミチモワスレテ笑フ人々ノ

ウナキトルヤラドチウトルヤラ

輿のうちにて独り口すさミ笑ひを催す、坂を下りけ
れは金沢の人家見へたり、日の山端にかゝる比金沢
の千代本か亭に著ぬ、入海を望ミみるにえもいひし
らぬ詠にて、向ひは山つらなり、野島といふ島も見
え、山とやまとの中を廻りて入し海なれば、かせあ
れと波もたゝす、いつくにかかゝる景色をは詠るこ
とのあらんや、今は宵やミにて月のみるめのなけれ
は人々をし見あひぬ、夜も子の刻過る比目覚けれハ、
月の詠をと戸をあけ独り窓によりて海上を見るに、
月の光り波にミちて金竜のおとるにことならず、し

はし詠めこしをれを思ひつゝけんすれと、ことの葉も及ひなければやミぬ、

廿日、けふはこゝにとゝまりぬ、昼かれい終り小舟にさほさしてつれて入江を渡り、一覽亭とて山上に遠望の処あれば、打つれて登りて入海のかたを見れば、千代本の亭の右に橋ふたつあり、勢田の橋のこくとく、あなたも入海遥にして能見堂といへる寺山上にあり、そハ帰りの道といふ、折しも湖の干かたにハ海子の子のうちむれて貝拾ふもまた面白し、
くたし見る汐の干かたこゝかしこ

打むれ貝を拾ふ蟹の子

南のかたハ海上遥にして白浪立て、雲井に安房のやまぐゝ見へたり、

海こしの雲路遥に見渡せば

波間に浮ぶ安房の遠山

遠望ことに興あり、爰より江府へ海上ハ遠きやと所の人にとへハ拾里とことふ、山を下り舟にのり野島を廻り漕行ハ、右浜辺に巾著石といふあり、打出たる崎に大岩武ツ三ツあれ、そこを西湖崎(朱書「潮カ」)といふ、ま

はり出れば南の方に(夏カ)復島・魚ほし島みゆる、皆岩ミ

に松生て人家はなし、今は引潮なれば舟のゆきゝもたゝ一筋にて行なやめは、しほし爰にとゝまり釣をたれ給へといふに、人々釣をたれたればはせ二ツ三ツを釣得たり、程なくミち汐になれハ舟こき返し、しほ干のかたに至れば爰にへそたれとて貝あり、得かたき貝なれと一ツ二ツとり得たらは御興にも成なんとといふにつれて、ゆきし人々を浜におりたゝせとらせぬれば、赤にし・あさりなんと数多とりたり、又やつかれも拾武とり得たれば、所の人驚きてあまた得たる事は此に生たる人はしらし、君の御威光にていてたらんといへハ人々笑あへり、こなたの浜辺にわらんへの男女むれてしほに入て海草をとりあり、そハいかなる草とゝひければ、海草をとり其根をかめは汁甘ミ有てかんの虫をころす、此所ハわらんへの虫もちすくなしといふ、日もかたふきて申の刻過る比なれば旅のやとりに帰りぬ、またあミをうたせたるにあまたの魚をとり得てきたれり、さまぐゝにちらぐゝして人々にもあたへぬ、ゆふ付日の入江に

うつるを見て、

ゆふ付日うつる入江に海士のかる

みるめゑならむ金沢の海

夜も入ぬれハやすぬ、

廿一日、けふハ立出んと思へとも、猶あかぬ名残の

あれは又爰にと、まりぬ、橋の下の水勢つよくして、

満干共にたる(朱書「マ、」ミなしてハ舟を漕行事成かたし、けふ

はいつの比行やすからんととふに、巳の刻すれば汐

もミちあかりて舟のかよひやすくといへは、やか

て小舟に撰しつれて橋より奥の方に漕行て向ふをミ

れは小島あり、照手の姫松といふ名しま也、向ひの

崎より老松の見えたり、こはいつくそととへハ、君

か崎の一ツ松といふ、又左の方より崎を小泉の夜の

雨といふ、こゝもかしことも八景のうちとことふ、

雨も降出ん空なればやかて漕戻して帰りぬ、昼かれ

い終りぬれば空晴たり、又かちより六浦称名寺とて

名高き寺に詣て、本堂にのほり本尊を拝して宝物を

見んと乞ければ、和尚持出来、懸物・仏像のたくい

なり、その中に

(朱書「マ天照大神宮の御作とて仏像あり、(妃カ)楊貴姫か玉篇有、

こは龜山院帝の納め給ふといひ伝ふ、また青磁の浮

杜丹(牡丹)の花入三ツ、香炉二ツ出したり、皆かけてミゆ

れはいかにと問ひけるに、昔し地震にたをれて破れ

たりと語る、青葉の紅葉ハむかし鎌倉中納言為相卿

の紅葉をみると此寺にまふてけるに、山々の楓いま

た也しに此一木計千人に染たれハ、為相卿の歌に、

いかにして此一本に時雨けん

山に先たつ庭のもミち葉

と詠せしより今に紅葉をとめたりとなん、此木のも

とにて、

立よれば青葉の楓年へても

昔しの人のおもかけそする

池の辺には八木池のうちに四石とてゆへある石あり、

爰には四木式石にてその余ハ金沢のうち所々にある

といへり、寺を立出もとの道を帰り、千代本の後の

山の茶亭にしハしやすらひけるに、主の娘の拾二三

才なるか茶を点し出たり、爰を出て瀬戸の大明神へ

詣てしかは、神主引すゝめて宝物をみんなといへは、

めん三ツ見せたり、何れも年をへし作と見へたり、社の脇に蛇木のあり、是は、

禁裏より御とめの木といふ、昔し唐土より渡し白檀

の木、其方かたはらに放下僧の図有、夫より打列登れハ

山上之眺望また替りて興に入ぬ、申の刻過る比に旅

のやとりに帰る、廿二日巳の刻計に立出、能見堂に

休みて山上により望ミたるに、大海も山こしに見へ、

入江の詠め見もしらぬ唐土洞庭湖もかくやと思ひ出

られたり、かたはらに老松あり、昔金岡といへる画

工の此光風を見て筆捨たりと、筆捨松と名付たり、

主和尚絵図持来り指さして教へたり、しハしやす

らひ関村といふ所二休ミ神名川へ未の刻過る比著て

草の枕を結ふ、

廿三日、けふハ帰府なれハ朝とく立出て、

けふまでと思へハ今朝の出かてハ

いつより猶もか本のま名残をそそふ

川崎に休ミ、沐浴・結髪・昼餉終りて又立出、釜屋

に未の刻過に至り著ぬ、爰には末男の二子人々も迎

とて来りぬ、飲のさかつき取はやし、程なく爰をい

てたちちをの御館に立寄、さま／＼のお本之物語りありて御暇を乞、申の刻過に白金の館に帰り著ぬ、

九日 晴天、忌中、
三三三三

一朝六ツ過起、吉左衛門と兩人二而弓射、今日者泊り

にて七ツ後より出勤、夕詰白尾金左衛門殿へ代合、

次渡等之儀毎之通段承置、押番園田良右衛門・郷押

番黒江三藏なり、夜五ツ前より兩人招呼、四ツ半時

分迄相咄、九ツ時分臥候也、

宵の比より詰所之軒もる月影二間余り入りて、庭の

色もいと面白かりければ、

吹風に露もみたれて夏夜の

月澄渡る玉敷の庭

慶元記抜書

一真田左衛門佐幸村申けるハ、大御所を生質臆病之

大将と批判あること以之外の沙汰なり、近代之武田

信玄ハ古今に独歩せる弓矢取也、本朝に比すへき者

なし、其信玄さへ申置れるは、參州之徳川家康ハ

今若手之内ニ東海道一之名將と云とも、終二者天下
一之良將と成へし、智有りて勇あり、然も猛からず、
恐しき者なりと仰置れし由と父安房守節々聞たりと
申せしなり、

十日 大霽、夕立烈し、忌中、

一朝六ツ過起、今日者泊り明ニ而四ツ後帰宅、又々直
二戸柱御墓江參詣、直ニ帰宅、七ツ後直八様へ申上
候而弓射之筈ニ而射場へ出張居候処、拙者矢取りニ
而射場の方へ參居候得者、後の方へ大雨降烈しく有
之候見候致音候付処、立ど之辺よりきわきりいつせ候様ニ暫
か間大雨降候、後小雨ニ相成候時漸々射場の方へも
降来、誠ニ世にいふ片袖ぬれて片袖不濡とは実也、
暫時か間立どの方へ立やすらひ、拙宅計之雨共ニ而
者無之者哉、只々不時宜ニ思ひ驚の氣を催せり、夫
より暮前迄之雨ニ而、夜者大之晴天、月あきらけし、
父上様御方へ罷出候へハ藤崎孫左衛門殿・渡辺彦太
郎殿・三原七郎右衛門殿・岩山玄伯殿来儀、各々九
ツ半時分被帰候、父上様二者暮より戸柱町田家へ御

出被遊候処、八ツ前御帰り、八ツ過臥候也、

一齊彬公御前様ハ、公方様御子様故、一体寛泰之御生

質之由ニ而、(齊意) 溪山公御病氣之節御夫婦様御詰被遊

候処、御前様御眠り被遊候へハ、齊彬公甚以御白眼

被遊候へ共、一向御知り不遊処より御年寄罷出、無

何体ニ而御前様之御袖をひかへられ候へハ御部屋へ

御下り、其晩ハ御暇ニ而御臥候と也、御側勤之人よ

り直咄承候也、

十一日 霽、忌中、

一朝六ツ半起、四ツ前出勤、八ツ後退城、今日者折田

氏江同席一統催ニ付而野夫ニも可參旨承候得とも、

当分ハ忌中ニ付相断候得とも、此儀ニ付而八天下一

統忌御免之上ハ何方へも可差越者之由被申候付、先

夫成ニ而承置、又々今日者得不參段被申吳候様ニ同

席方へ相頼候処、亭主よりも不差支段被申候ニ付而

者何ぞ差支之儀無之、是非可差越旨承候付、左様な

らばと差越候而、夜る五ツ時人々より先ニ罷帰候而、

父上様御方へ罷出候へハ藤島孫左衛門殿・相良市之進

殿・福留吉左衛門罷出居候、各々九ツ過被帰候、同刻臥候事、

右之通地頭於宅可被申渡候、
十一月 (島津久澄)
石見

石見殿より市被仰渡候御書付之写

一 写

谷山地頭

青銅式千疋

用達江

谷山中塩屋善右衛門掣

御米四石

養子源左衛門妻

谷山中塩屋善右衛門掣

千亀

養子源左衛門妻

右書同断、旁奇特成心入之段達

千亀

御聞、別段 御褒美被 仰付候段

右者幼少より父母江致孝養、母二者長血之煩有之候

(音直側室、音興実母)
宝鏡院様二も被

処昼夜付添致看病、穢候衣類は毎日三四度ッ、寒

思召候、仍而為 御褒美御内々右之通被下候事、

中者水を碎き致洗方、至極深切二相事候得共、終二

右之通御側御用人高田十郎右衛門御取次二而御側

者致病死候処、別而及愁歎、暮参者勿論、牌前へ香

御用人座二而被仰渡候、尤、当人二者於御地頭所

花・灯炉等無懈怠手向、祖母并夫江も何篇叮嚀相事、

二申渡相濟候、此段可申渡旨御差込二而候、以上、

殊更親類又ハ近所極難之者見兼候節者、米銭・衣類

用達

等施行いたし候儀も及多人数、旁奇特成心入之段

丑十二月五日 内田直右衛門

被 聞召上候、依之為

谷山郷士年寄中

御褒美右之通被下候条、難有頂戴可為仕候、

十二日 晴天、忌中、

一朝六ツ半起、夕詰故九ツ過より出勤、次渡等之儀每之通之段月番より承置、泊番鎌田哲二郎殿江代合、次渡等同断申置、七ツ後退 城、大鐘時分弓拾建計射る、暮より父上様御方へ罷出候得ハ藤島孫左衛門殿・三原七郎左衛門殿・平野吉之丞殿・松岡喜左衛門殿被罷出、各々九ツ過被帰候、八ツ前臥候也、

十三日 大晴、昼時分暫小雨、又霽、忌中、**丑三ツ半**

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後退 城、帰懸戸柱町田家御墓・拙家御墓参詣、夫より帰宅、大鐘前より町田郷十郎殿・松岡喜左衛門殿来儀、父上様・野夫四人弓四拾建射る、日入前より吉左衛門二も射る、暮より父上様御方へ罷出候へハ藤島孫左衛門二も被罷出候、同刻より拙者方江左近允新七殿・上村周内殿・相良休右衛門殿・植村鉄兵衛殿被参、九ツ過各被帰候、九ツ半時分臥候也、

十四日 快晴、忌中、

丑三ツ半

一朝六ツ時過、五ツ時より花舜軒より御墓・戸柱御墓同断、直二出勤、八ツ後御暇、大鐘過より福留親子・拙者三人二而暮迄弓、夫より父上様御方江罷出候得者藤島氏被罷出、九ツ時被帰候、余り之晴夜月二うかれて八ツ過臥ス、

十五日 晴天、朝五ツ時大地震(朱書「マ、鉢カ」)石体の水ゆりこぼす、

丑三ツ半

一朝六ツ時起、五ツ時出勤、四ツ時

太守斉興公御書院江御出座、八ツ後御城下祇園踊出役、七ツ前帰宅、大鐘時分より暮まで弓射、外二市郎左衛門・吉左衛門射る、暮より父上様御方江罷出候得者前御むら様・三原七郎右衛門殿・相良市之進殿被罷出候、四ツ半各々御帰、九ツ過臥候也、

十六日 霽、忌中、

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、暮より父上様御方江罷出候へ者二王堂馬場之おのり様・三原七郎右衛門殿被罷出、四ツ過被帰候、九ツ過臥候也、

十七日 晴天、昼時分俄二大雨・雷鳴、又霽、

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後退 城、暮より父
上様御方江罷出候得者横山安之丞殿・伊藤万次郎殿
被罷出、四ツ過被帰候、九ツ時臥候事、

十八日 霽、忌中、

壬子三月

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、大鐘より伊
藤万次郎殿・福留吉左衛門三人二而弓射、暮より五
寸を三的二立候而二ツ矢射候而引筈也、左候而、二
ツ矢無之引候節ハ地ニ臥し而礼をいたし候筈之処、
野夫六建目ニ二ツ矢二而引、吉左衛門七立目ニ而二
ツ矢二而引、万次郎殿忝人者六ツ半時迄被射候得共
二ツ矢無之、地ニ伏シ礼被致候也、甚残念之体ニ而、
忝度此返報を返すと被申甚以怒之体也、暮より父上
様御方へ罷出候得者藤島孫左衛門殿・三原七郎右衛
門殿被罷出、四ツ半被帰候、九ツ前臥候也、

十九日 霽、忌引、

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、暮より父上

様御方江罷出候得者藤島氏・三原氏・相良市之進殿・
木尾彦左衛門殿被罷出、九ツ時被帰候、九ツ半時分
臥候也、

一今般琉球登りニ而海賊ニ会候足輕上村權之進を御兵

具所江呼出し段々承候へハ、自分乗候船琉球登り之

メラン船にて当月三日ニ琉球を出し、四日之巳之刻

右之上乗ニ而大和入權之進也

計に黒船を見掛候付、權之進より、向ニ見得候ハ異

国船也、用心可致旨琉人共へ申候へハ、あれハ何ぞ

障り候舟ニ而無之、阿蘭陀ニ而何ぞ差支無之旨申候

而、段々近寄二丁計之処江參候へハ、惣体青色之伝

馬四艘をおろし一ツ一ツに帆三ツツ、掛押寄候処、

其早き事矢之如きよし、メラン船之脇江參候へハ、

直無何事つるくくと二十人余乗込、瓶壺ツを持出し

琉人江焼酎之様成者(物之)を為吞候付、琉球之アハモリも

為吞候処、やかて船中之者を勝手次第第二伝馬江持込

不及手式二候付、左様不致様琉人共より申候へハ、

鑑之様成者(物之)ニ而突之、何之歟のと申候而伝馬四艘ニ

一盃積入、一艘杯ハ余り多く積しつむ様ニ有之候付、
為取品を又々海中江捨候者も為有之由、大和人居候

而ハ不宜とて右之權之進ハ陰し置候由、強盜を働し者蔭より覗居候由、取候品者反物・衣類・アハモリ等也、翌五日又々伝馬二艘をおろし參候付、又々昨日通ニ強盜を働へきと船中騒働不斜処、右伝馬之者共手まねきをいたし候付見候へハ、昨日取候品積入候付、是は昨日之品可返とならんと各々しづまり居候へハ、如案其品をつる／＼と持込候由、左候而、書付を出し候得共横文字ニ而何も不読、致推察候者、昨日者酒狂ニ而段々致騒働候半と申事ならんか、しかし返したる品者何も不用之道具也、三ツ一丈計為返と也、メラシ船者親雲上を頭として三人乗居候へハ、其者共笄者皆取候と也、壹人之親雲上ハヒツツ之衣裳を著し居候処、夫もはぎ取候と也、權之進がかはごも壹ツ取候処、上下之分ハ返したると也、刀も取候へ共鞆ハ打わり身計取候由、決而鞆之拔様不存ならん、

鼻大きに高く、目たご目、
髭より髪迄イ、毛之由、

高サハ六尺七尺と也、



各々腰ニ者鉄炮之壹尺五寸・式尺計なるを付居候由、左候而、銘々斧・鑓・ケンなど持居候由、其図左之通と也、

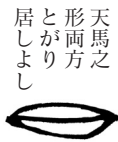
長壹間位



長壹尺五寸位



斧之形者不承、



一本船へ者帆五ツ引有之候と也、

二十日 晴、忌中、

手三用

一 朝六ツ半起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、大鐘時分より郷十郎殿・吉左衛門杯二而暮迄弓射、暮より父上様御方江罷出候得者段々客人有之、九ツ時御暇、同刻臥ス、

二十一日 雨、忌中、

一 朝六ツ起、四ツ前出勤、八ツ後退 城、為精進落家来とも其外山田愛藏殿八ツ後より被罷出候、暮前より孫左衛門殿・喜左衛門殿・勘右衛門殿・甚右衛門殿・西之原源兵衛殿・前之内記様御出、四ツ時分皆々被帰、九ツ時分臥ス、

二十二日 雨、夕より東風烈しく夜中吹通ス、

一 朝六ツ過起、四ツ時出勤、八ツ後御暇、八ツ後より二階堂源太夫殿・竹之下三次殿・島津権五郎様御出、御精進落なり、暮迄御帰り、暮前より藤島氏・松岡氏・伊藤万次郎殿・渡辺彦太郎殿被參、四ツ過各々被帰候、九ツ過臥ス、

二十三日 雨風烈し、夜二入止、忌中、

一 朝六ツ時起、四ツ前出勤、八ツ後退 城、暮より父上様御方江罷出候得者客人段々有之、四ツ半被帰候、九ツ時臥ス、

廿四日 間々小雨、忌中、

一 朝六ツ過起、四ツ前より二建余り弓射、今日者泊り番二而七ツ後出勤、夕詰鎌田休之進殿江代合、申渡一件之儀次渡有之、外二毎之通之次渡承置候、夜ル五ツ前より押番川路七左衛門・郷押番川路与右衛門召呼、四ツ半時分被引取、九ツ前臥し候也、

廿五日 雨、忌中、

一朝六ツ時起、泊り明二而四ツ後退 城、八ツ後戸柱
參詣、直二帰宅、暮より父上様御方へ罷出候得者藤
島孫左衛門殿・中馬甚右衛門殿・松岡喜左衛門殿被
罷出、各々四ツ過被帰、野夫二も同断、九ツ時臥候
也、

廿六日 雨、間々日照り、忌中、

一朝六ツ半起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、帰懸直二戸
柱御墓も参詣、直二戸柱之様參、今日御ば、様御法
事二付而也、夜五ツ時帰る、四ツ半、
(以下欠)

廿七日 小雨、忌中、

一朝六ツ過起、四ツ時出勤、八ツ後退 城、暮より父
上様御方江罷出候得者藤島氏・中島氏・相良氏被罷
出、四ツ過被帰、同断御暇、九ツ前臥ス、

廿八日 間々小雨、忌中、

一朝六ツ時起、夕詰二而八ツ前より出勤、七ツ後郷原

転殿江代合御暇、父上様御方へ罷出候得者石原五之
助殿・中馬甚右衛門殿・堀口滴濟・松岡喜左衛門殿・
藤島氏・郷十郎殿・伊藤万次郎殿被罷出将棋指、夜
九ツ過被帰、八ツ時寝候也、

廿九日 小雨、忌明、

一朝六ツ時起、四ツ時出勤、今日より忌明故、四ツ後
より御暇にて下方廻り、大鐘過帰宅、暮より父上様
御方江罷出、四ツ半御暇、直二臥ス、

常不止集十六之卷

天保十三年壬寅七月申

一朝六ツ時、(起脱カ)五ツ半出勤、今日者琉人立之王子初而之
登城二而御楼門上より行列を見候、屋形下中之辻之
方江登り、御堀付を横切御楼門より登城、路次衆も
御楼門橋際二而取止、王子茂同所二而下、圍馬・騎
兵者中之辻御番所下二而下馬、八ツ時琉人退出、屋
形之下角掛繩出来、夫より外諸人見物人幾千といふ

数を不知、八ツ後拙夫御暇、七ツ時より上方忌中見廻之礼廻り、暮帰宅、直二父上様御方江罷出候得藤島氏・中馬氏・三原氏被罷出、各々四ツ過被帰、同刻御暇、九ツ時臥ス、

玉城里之子

一 樂師

亀川親雲上

牧志親雲上

浜元親雲上

富永親雲上

城間親雲上

一 此節琉人立二上国之琉人役目賦之荒増

一 議衛正 伊計親雲上

一 圀師 真喜屋親雲上

一 掌翰史 久場親雲上

一 正使 浦添王子

一 副使 座喜味親方

一 贊議官 糸洲親雲上

一 樂正 池城親雲上

一 樂童子

安里里之子

幸地里之子

島原里之子

真壁里之子

豊見城里之子

二日 小雨稀二降、

一 けふ八朝とく起、ちとさゝわりのあれば、勤八同官の衆へたのミて登 城のこ者やめぬ、朝より郷十郎殿まいられ、暮に者またかへられぬ、おなし時より父上の 公のところへいてけれハいつもの人々きたられぬ、亥の刻過る比残なくかへられ、やつかれにもこよひの暇を乞て、子の刻はかりに臥しぬ、

三日 霽、

一朝とく起て辰の刻過る比浄光明寺浄国公・月桂院様

(豊実母)

の御前へもふて、夫より直二公務にいてぬ、未之刻
過て同官打列、御暇、かへり懸梅田ぬしのところへ
まいりぬ、是者おと、ひ治教ぬしハ御側役勤之命を
こふむり、孫の勘十郎ぬしハ表御小姓にて日勤に不
及、親同前指南方いたすへきのおふせなればかのよ
(朱書「マ」)
ろこひにまいりぬ、申之刻前にかへりぬ、暮より父
上之 公の処へまいりけれハ横山安之丞殿ぬし・安
田喜藤太ぬし・三原ぬし・中馬ぬし・藤島ぬしまい
られ、子の刻過る比かへられぬ、やつかれも御暇に
て臥しぬ、

四日 晴天、

四日 晴天

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、帰掛岩崎島
津求馬殿所へ参り、直二帰宅、大鐘過より弓射、暮
より父上様御方へ参りけれハ前之内記録・藤島氏・
(出脱之)
中馬氏・三原氏扱被罷、四ツ過被帰候、九ツ時分臥
候事、

五日 晴天、

五日 晴天

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、直二帰宅、
七ツ後より郷十郎殿・喜左衛門殿・吉左衛門・市郎
左衛門にて弓射、暮より父上様御方へ罷出ければ郷
十郎殿・喜左衛門外二三原氏被罷出、九ツ時分被帰
候、九ツ過臥候事、

一矢部駿河守ハ松平越中守殿へ御預相成候処、此節御
(定謙)
赦、在所へ御帰し之節詠歌、

君をおもふ心計ハ替らしな

うきは我身にいやつもるとも

立別れ行身ハ糸によられけり

まことある人に心引れて

我宿の名残より猶中々に

立うき今朝の旅衣かな

うつし見るか、ミなければ妻子のミか

我影にさへあわて過ぬる

六日 晴天、

一朝六ツ半起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、直二帰宅、
七ツ前二女致出生候得とも失亡にて残多候、就而者

親類方多人数集候事、

七日 晴天、

一朝六ツ過篠原二三二殿へ申遣、四ツ時入来、昨日より五日者得出勤不致候間、病氣ト二而も御取計被置被下度月番方へ伝声相頼候事、夜九ツ過臥ス、

八日 晴、

三ツ時御暇

一朝六ツ過起、四ツ時より町田郷十郎殿入来、七ツ時分より平山矢九郎殿・松岡喜左衛門殿・父上様・野夫にて暮迄弓射、九ツ時臥ス、

九日 晴天、

五ツ時御暇

一朝六ツ過(起脱)後吉左衛門召呼、カツヲ鳥一尻分羽わり方相頼候、八ツ前より郷十郎殿入来、大鐘過より弓射、暮より父上様御方へ石原五之助殿・松岡喜左衛門殿・堀口滴濟・藤島孫左衛門殿・三原七郎右衛門殿被罷出将棋、拙者二者見物、九ツ過各々被帰、八ツ過臥ス、

一川上甚左衛門殿歌、春駒の題

桜かり誰かのる駒かよほふらん

花のおくなる声のゝとけき

十日 晴、

三ツ時御暇

一朝六ツ過起、七ツ後弓射、暮より父上様御方江罷出候者藤島氏・三原氏被罷出、四ツ過被帰候、夫より御暇二而九ツ過臥ス、

十一日 霽、

三ツ時御暇

一朝六ツ半起、四ツ前より前屋敷・升形へ参る、夫より出勤、八ツ後御暇、七ツ後より弓射、暮より父上様御方へ参上、四ツ過御暇、同刻臥ス、

十二日 霽、

朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、大鐘より弓、暮より父上様御方へ参上、四ツ過御暇、九ツ半時分寝候也、

十三日 霽、

朝六ツ過、(起脱カ)今日者夕詰ニ而九ツ時より出勤、出掛前

屋敷へ一刻参る、大鐘退城、泊番ハ郷原転殿也、帰

懸桁形へ一刻参り帰宅、八ツ半時分臥ス、

十四日 晴、

一朝六ツ時起、暮前より浄光明寺・福昌寺・妙顕寺江

参詣、夫より夜五ツ過帰宅、九ツ半臥ス、

十五日 晴、

一朝六ツ時起、暮前より福昌寺へ参詣、夫より戸柱へ

参り、夜五ツ過帰宅、九ツ時

(朱書「マ」)御^口様御立、夫より家内中諸子祝、八ツ過相済、

七ツ前臥ス、

十六日 霽、

一朝六ツ半起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、

十七日 晴、夕立ばらく、

一朝六ツ半時分起、四ツ時出勤、八ツ後御暇、

十八日

一曉大鐘起、六ツ時より前之浜上築地より出帆ニ而心

岳寺へ参詣、九ツ過又々漫頭石江著船、直ニ帰宅、

四ツ半臥ス、

廿八日

御首途、琉球人同断、浦添王子賀慶使途中樂ニ而参

詣、見物人幾百の数をしらす、

常不止集拾七之卷

天保十三年壬寅八月申

朔日 晴、

一朝六ツ過起、四ツ前前島津家へ参り、夫より升形権

五郎様へ参り、夫より直ニ出勤、九ツ後御暇、帰宅、

八ツ後より倉山作太夫殿首途祝ニ差越、五ツ半帰宅、

四ツ時分臥ス、

二日 晴、
（御事）

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、七ツ後より
島津鞠負殿所へ参り、直ニ今和泉屋敷安芸殿方ニ而
暮迄弓射、夫より帰宅、父上様御方へ罷出候得者例
之客人三四人、九ツ前御暇、直ニ臥ス、

三日 晴、今日者琉球人南泉院参詣ニ而路次楽有之、

一朝六ツ時起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、七ツ後より
今和泉屋敷江参り弓射、外ニ伊十院半之丞殿・石原
八次郎殿・曾山喜三太殿、御亭主安芸殿なり、暮ニ
御暇、夜四ツ半時分寝候事、

四日 晴、

一朝六ツ時起、五ツ半時分出勤、今日御兵具所御代々
様御召御鑑千方二而内匠殿・又八郎殿・三十郎殿御
出、其外之拜見人数数多なり、八ツ後御暇、七ツ後
より鐘場へ出張、先達而父上様五拾日之御忘中より
内稽古、有川直次郎殿所へ相直置候而、今日より又々
拙宅ニ而有之、出席人数八人、暮引入、夫より相良

市之進殿・町田郷十郎殿・三原七郎右衛門殿入来、
市之進殿二者五ツ前被帰、其外四ツ過被帰、九ツ時
臥ス、

庭の萩盛なるを

我宿のあれたる庭を秋のゝと

ふかむらさきの萩も花咲（朱書「マ、」

五日 晴、

一朝六ツ半時分起、四ツ前出勤、八ツ後退 城掛町田
家へ参り、八ツ半時分帰宅、大鐘より郷十郎殿入来、
暮より七郎右衛門殿・吉左衛門入来、相良市之丞殿
入来、郷十郎殿二者早く帰り、其外四ツ過被帰、直
ニ臥ス、

六日 晴、
（御事）

一朝六時過起、四ツ時出勤、八ツ後御暇、七ツ前より
些用事有之前内記様へ参り、直ニ今和泉屋敷安芸殿
方ニ而人数分弓有之、拙者二者七本ならし射候得共
負方ニ而、来ル九日二者的拾差出候筈、暮帰懸又々

前屋敷ニ而碁打之筈ニ而差越、夜四ツ過帰宅、

一 公義通達

大目付江

自今新板書物之儀、儒書・仏書・(神書脱力)医書・歌書都而書

物類、其筋一ト通り之事ハ格別、異教・妄説等を取
交作り出し、時之風俗・人之批判を認候類、好色画
本等堅可為無用事、

一人々家筋・先祖之事杯を彼是相違之儀共新作之書物

ニ書頭し世上致流布候儀、弥可為停止事、

一何書物ニよらず新板之もの、作者并板元之実名奥書

ニ為致可申事、

一唯今迄諸書物ニ(家康)権現様御名出シ候儀相除候へ共、

向後急度いたしたる諸書物之内押立候儀ハ御名書入

不苦候、御身之上之儀且御物語等之類相除、御

代々様御名諸書物ニ出し候儀も右之格ニ心得可申旨

享保度相触置候処、都而明白ニ押出し世上に申伝へ、

人々存居候儀者仮令御身之上御物語たりとも向後相

除候ニ者不及候、

但、軽きかな本等之類は唯今迄之通り可相心得候、

右之外曆書・天文書・阿蘭陀書籍翻譯物者勿論、何

之著述ニ不限総而書物板行いたし候節、本屋共より

町年寄館市右衛門方江可申出候、同人より奉行所江

相達、差図之上及沙汰候筈ニ付、紛敷儀決而無之様

可致候、且又彫刻出来之上者一部ツ、奉行所江可差

出候、若内証ニ而板行いたすにおひてハ、何書物ニ

不限板木焼捨、かゝり合之者共一同吟味之上嚴重之

咎可申付候、右之通町触申付候間、諸家蔵板之儀も

右ニ準し、其以前当人より学問所江草稿差出、任差

図彫刻出来之上者一部ツ、学問所江可相納候、万一

私ニ刻板致し候輩も有之候ハ、急度可在御沙汰候条、

兼而向々江も相触可被置候、

六月

大目付江

文学之儀者当時格別ニ御世話被為 在、追々官板も

被 仰付候処、諸家蔵板ニ至り候而者僅ニ数十部ニ

者不相過哉二候、一体大身之輩ハ心懸次第大部之書

一 二部宛も蔵板ニ致し、普く後來江も相伝候様有之度事ニ候、此段十萬石以上之面々江無急度可被達置候事、

六月

大目付江

諸組与力格

長崎町年寄

高島四郎秋魁大夫

右四郎大夫儀、先達出府之節兼而心得罷在候火術伝来之秘事迄不殘御直參之内執心之もの一人江伝授致し、右之外猥ニ相触候儀者仕間敷旨申渡置候処、以来其儀ニ不及候、御直參勿論、諸家執心之者江者勝手次第伝授可仕旨可被申渡候、尤、異様之冠物・衣服等不相用、常体之笠或は陣笠・野袴・小袴・陣羽織等ニ而為致稽古候様可致旨をも可被申渡候、

右之通長崎奉行江相達候間、承合候向も有之候ハ、致稽古不苦旨可被達候、

七日 霽、

一朝六ツ過起、四ツ時出勤、八ツ後御暇、七ツ後より鐘場江出張鐘削り、暮引入、夫より父上様御方江罷出、四ツ過御暇、八ツ時臥ス、

八日 晴、夜四ツ過より雷雨、

一朝六ツ時起、今日者父上様より倉山氏江御餞別二付、島津清太夫殿・二階堂部殿・二階堂源太夫殿・前内記様杯御出有之、父上様ニも御出勤無之、夫故拙夫も同断、八ツ後各々来儀被成、四ツ前御帰也、四ツ半時分臥ス、

九日 曇晴、夜ニ入雷雨、
三ツ時前御出、三ツ時前御帰

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、八ツ半時分より今和泉屋敷江弓射ニ參上、暮御暇、夫より父上様御方へ參上いたし候得者藤島氏・中馬氏・三原氏參上、今日者父上様二者校島へ御出ニ而五ツ過御帰、渡辺氏も御同伴故又々入来也、四ツ過各々帰り、九ツ半臥ス、

十日 雨天、

一朝六ツ時起、四ツ時登城、八ツ後御暇、五ツ時より御ば、様御方へ罷出、四ツ半御暇、九ツ過臥ス、

十一日 朝後霽、

一朝六ツ過、(起脱)今日者夕詰ニ而八ツ前出勤、七ツ後御暇、

折田氏泊番ニ而代合、次渡等月番より何も無之段承候付同断次渡置、七ツ後帰宅、直ニ韮負殿所へ弓射

ニ参リ二拾建余り射、暮帰宅、夫より父上様御方へ罷出候得者藤島氏・三原氏被罷出、四ツ過被帰、九

ツ前臥ス、

十二日 晴天、

一朝六ツ半起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、七ツ前より

今和泉屋敷へ出張弓射、安芸殿御方也、日入より三
十郎殿御庭江鍵稽古有之候付彼方江も罷出、暮御暇、

父上様御方江罷出候得者中馬氏・三原氏被罷出、四
ツ半時分被帰候、今日者 御ば、和歌浦様御事也御本丸江

四ツ過より御上り、夜四ツ過ニ御帰也、白リンズ并

金子二百疋御いた、き御帰、右之外ニも御菓子等余
多あり、殊ニ又先達而者難有御意共有之候由、戸柱
之御ば、様御病氣之時分父上様御看病御暇之御願被
成候処、当日女中かたへ

太守斉興公奥ニ而御意候者、和歌浦ハ病氣ニ而有之
候が、其方抔者存候かと御意候付、存不申之御返事
被申上候得ハ、今日右膳看病暇申出候と御意候付、
夫ハ決而和歌浦ニ而者無御座、今壺人右膳実家之方
老母御座候間、其者ニ而ハ無之哉之旨御返事申上、
則其御御ば、様へも文抔と遣し為見と御年寄園川
との咄之よし、御ば、様御咄也、誠ニ深く御氣を被
為付候御事、恐入難有事共也、

十三日 霽、

一朝六ツ時起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、七ツ前より

村橋彦九郎殿江参り、七ツ後より亭主其外桂喜十郎
殿・渋谷左膳殿同道ニ而知覽浜屋敷へ参る、今日ハ

御兵具方伝来之花火久々無之候付、御兵具方花火ニ
付而者格別之由緒も有之事候間、伝来相失候而者誠

二以残多事候間、当年より年二忝度ツ、者是非有之度旨申出相成、今晚初而久々振有之、都合四拾八本上る、夜四ツ半時分相濟、直二帰宅、九ツ過臥ス、一御兵具所火花之儀ハ、朝鮮御渡海之砌長御陣二而何も御樂之儀無之、塩焔二而何歟樂二相成事ハ無之哉之旨

(家)中納言様御意候付、火花を致工夫上候処、

中納言様御直二高麗堤と御名を被為付候由、誠二御面白きものなりと至極之御満悦二而、又是より外二工夫を付よと御意候而出来候時、是ハ古風なるものと御意候由二而名二いたしたると也、其後又玉火を工夫いたしたると也、夫より次第二工夫出来一統之花火有之となり、右三ツハ御兵具所至極之由緒も有之、御兵具所玉火之儀ハ又名高きもの、よし、今夜之玉火も惣体宜敷、皆同高き二て上り付時分二ほつと消へ候、誠二為勝もの也、

十四日 曇、暮小雨ばら／＼、

一朝六ツ時起、鞞負殿所へ参り弓射、五ツ過帰宅、今

日者母上様御忌日故花舜軒御寺御墓参詣、七ツ時よりしばらく右松家へ参る、是は明日備立有之二付而也、夫より御殿泊番二出勤、夕詰鎌田愛太夫殿江代合、次渡等之儀者毎之通之段承、夜ル五ツ時当番頭北郷哲五郎殿初泊番二付可参段被申越候付差越、四ツ過本座へ帰ル、九ツ時臥ス、

十五日 曇後雨、

一朝六ツ時起、今日者平田鞞負殿江朝出相頼、宮之城備立江五ツ過より出張、八ツ後帰宅、暮より右松家十五夜嘸へ出張、八ツ時帰宅、直二臥ス、

十六日 終日曇、夜二入大晴、

一朝六ツ時(起脱)前出勤、八ツ後より花舜軒御寺御墓江参詣、(音)掛伊藤善兵衛殿江参り、夫より妙頭寺月(音)桂院へ参詣、清風先生之墓へも同断、直二帰宅、七

ツ後より鑓場江出張、暮引入、夫より父上様御方へ罷出候得者藤島氏・三原氏・相良氏被罷出、各々九ツ時分被帰宅、九ツ半臥ス、

十七日 雨風烈シ、

一六ツ半時起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、七ツ後より郷十郎殿入来、暮前より相良市之進殿入来、郷十郎市之進殿共二六ツ半時分被帰、同刻より渡辺彦太郎殿来儀、九ツ前被帰、八ツ過臥ス、

十八日 大晴天、

一朝六ツ過(起脱)、四ツ前出勤、八ツ後御暇、大鐘前より拙宅鐘場へ出張、出席拾式人、七ツ前より郷十郎殿来儀、暮過被帰、暮より相良氏・三原氏・藤島氏父上様御方へ被罷出、野夫ニも同断、四ツ半時分ニ御暇、九ツ時臥ス、

一御ちま様御内証様白心和尚地獄極楽之御尋有之候得者、何之御返事も不申上、小僧江茶を入可參之段只申居候付、又々御尋被成候時白心和尚被申上候ハ、只今之様二小僧之前にて御返事難申上、極楽ハ只今あなた様之様ニ被成御座候が極楽ニ而御座候、地獄ハ獄屋二入候が地獄ニ而御座候、何ぞ地獄極楽といふ別世界は無御座候、しかれとも小僧杯江者地獄ハあるも

のと教置、夫をなきものと諸集を見、座禪をいたしかたゞにてさとりを聞き不申而者、本の僧にてハ無御座候と被申上候由、

一西行法師何某とかいふものと同しふところに寝られ候時、ふしを頭より打かぶり候といふ夢を被見、右之漸を同しふところへ臥(朱書「マ、」)しものへかたり、よき夢か否哉を被申とき、ふしかぶるといふ夢ハ此上なかるへきと申、近所之占者へ右漸承候もの占ニ参り候へハ、是ハよい夢也と承り候而帰り候、跡こしに又々西行被參ケ様ゞの夢を見候、占をと被申し時、今何某被參同断之夢見候と被申候、是ハ不時宜也申せし時、西行甚立腹、人の夢を我夢とし甚不屈也と被申候へハ、右之者返答に、貴公と同しふところに貴公ふしをかふるといふ夢ならハ、此方にもふしはかぶるへしと申候へハ、流石の西行も一言無之被引取候よしはなしなり、

一谷山角太夫殿歌純香桃源和歌集 資枝卿御褒詞の分書抜

(朱書)校定者曰、
以下、台本ハ六枚半白紙ノマ、ナリ、後日書キ入レノ意ナリシガ如シ、

秋部

立秋 よろしく候、

浅茅原露もこほれて秋きぬと

夕日かくれに初風ぞ吹

早秋 可然候、

天河秋たつ浪の初風に

七夕つめの袖やすしき

初秋 よろしく候、

松風の音かはるより高砂の

おのへのしかも秋やしるらん

七夕 詞つゝき優美にてよろしく候、

秋かけていひしハたかふならひをも

しらぬ契りや星合の空

よろしく候、

めぐりあひし神代のまゝに七夕の

契りやたへぬ天の浮橋

天つ風けき吹とちて七夕の

わかれをとめよ雲のかよひち

七夕契 右おなし、

秋をへてたえぬ契りハ神代より

幾久かたの星合の空

女郎花 右をなし、

たか秋におもひしほれて女郎花

あきゆふ花の露をかるらん

可然候、

女郎花かせと露とのいつれにか

契りてときし花の下ひも

女郎花靡風 可然候、

をみなへしなひくものからうき秋の

風やかこちて露こほすらん

閑庭薄 右おなし、

まねけともとハれぬ宿の花すゝき

たゝいたつらに秋かせそ吹

荇萱 よくおもひよられ候、

いつまでか身にかかるかやの花さかぬ

ことのはつゝく思ひミたれん

蘭 よろしく候、

あきかせにほころふのへの藤袴

きて見る袖も香に匂ふ也

草花露 可然候、

もゝ草の花咲露のあさからぬ

恵をいつかことのはに見ん

古今にものおもふ宿の萩の露とあれハかよふか、

雁のなく朝けの野へをきてみれば

千くさの花に露そあまれる

武蔵に侍りけるとき よろしく候、

武蔵のゝしけき恵のつゆに咲

花の千種そかきりしられぬ

朝草露 よろしく候、

花の上の露も朝日にかゝやきて

砌の千くさ色そはへある

桃源亭於山家当座 おもしろく候、

月やとる草の庵りは秋さむく

置そふ露もはらへてそみる

秋田露 よろしく候、

かりほもる袖さむからし小山田の

色つくいなは露ふかくして

うちなひき露そ置そふとよとしの

千町の稲葉色になる比

秋虫 よくとゝのひ候、

露ふかきよさむの野へにたかためと

はたをる虫の声しきるらん

夕虫 可然候、

千よの秋君かみきりの夕露に

なくまつ虫の声もつきせし

湖上雁 右同し、

花そのゝ春をミすてし雁や今

月澄しかの秋にきぬらん

遠天旅雁 よろしく候、

わかれこしとこよもとふく雲霧の

へたつる空に雁やなくらん

鹿 右同し、

うき妻をまつの秋かせ身にしめて

くるゝ尾花の鹿やなくらん

夜鹿 右同し、

ねられすやしかもなくらん小秋原

下葉色つく秋のよ寒に

山鹿 よろしく候、

たのめぬるつま待かけを立とにて

くるゝおのへの鹿やなくらん

野鹿 右おなし、

へたて行妻やしたひて秋霧の

たちのゝ末に男鹿なくらん

野外鹿 可然候、

露ふかき秋の野原のさゝ分て

うきふしありと鹿やなくらん

岡鹿 よろしく候、

秋風に早田の稲葉いろ付て

やまの岡辺に鹿ぞ鳴なる

鳴 おもしろく候、

うき秋は野沢の水にもゝはかく

鳴も心の行かたやなき

秋夕 可然候、

うき秋夕(采書「マ」)への空になかめしと

おもふものから袖そ露けき

霧 よろしく候、

蛸の声はかりして立霧に

のきはもわかぬ小のゝ山かせ

月 よろしく候、

明らけき神代のまゝの秋つすに

すむ久かたの月そくもらぬ

海山のいつくにみるもさやかなる

影ハへたてぬ秋のよの月

はるくくとミネのあらしやをくるらん

空行月にくもゝかゝらす

可然候、

澄影はすゝきをしなみ降つもる

雪とミきりの秋のよの月

よろしく候、

すまのあまのうらのとまやも影の内に

海ミやくるゝ月のさやけさ

よをかさね馴みる月のさむしろに

露霜置て秋そ更ぬる

暁月 右おなし、

つゆともに起ゐて見すハすむ影も

袖のほかにはや有明の月

月前星 よくとゝのひ候歟、

秋にすむ空そくまなくてる月に

星もくもらぬ影をならへて

野月 可然候、

はなすゝきなひくもみえて影はるゝ

野原の月に秋かせそ吹

江上月 よろしく候、

霧はるゝ入江の浪の月影に

芦の葉かせの音もさやけし

故郷月 可然候、

秋いくよみる人なしに高円の

おのへの宮の月ハすむらん

山家月 よろしく候、

よゝしとも誰にか告ん人めなき

ミやまの庵の秋の月かけ

擣衣 よろしく候、

くるゝよハ賤かきぬたの音たてゝ

やまもと寒き秋風そ吹

可然候、

海士衣おのかうらゝよやさむき

あかしも須磨もうちそたゆまぬ

よろしく候、

風さそふ秋のよさむのかりかねに

声うちさふる賤かさ衣

やま里は秋のよさむや正木散

かせのきぬたの音そ絶せぬ

おもしろく候、

正木散秋かせさむきやま里に

音たてゝ打賤かさ衣

海辺擣衣 よろしく候、

月更るうらの秋かせ身に入て

衣打らし須磨のあま

しほかせのよさむしられて(朱書「マ、」芦ふきの

木屋ハひまなく衣掃こゑ

菊 よろしく候、

植たてゝたかみきりにも咲菊の

花にちとせの秋契るらん

菊久盛 よろしく候、

秋をへてふりせぬ菊の花なれば

むへ久かたの星かとそ見る

浜菊 右おなし、

吹上の浜辺の菊の咲しより

浪の花さへかほる秋かせ

重陽宴 右をなし、

宮のうちにくむハいかなるさかつきの

光をそふるけふの白菊

黒葛原兼峰か前栽の菊の新華に人々歌よみて名

つけ侍りけるに紫の菊をすり衣と名つけて

可然候、

すり衣わかむらさきの袖の色に

匂える菊をつむもむつまじ

紅葉 よろしく候、

四十経て馴みる色のあさからぬ

紅葉にならぬことの葉も哉

紅葉交松 右同し、

たちまじる松をのこして露霜の

岡へにそむる秋のみちは

蔦 右同し、

小倉やましくるゝ木々やかけしめて

みしよへたてぬ色にそむらん

暮秋雲 よろしく候、

いつしかとしくれもよせすうき雲の

立そふ空も秋そくれゆく

秋時雨 可然候、

過にけりかたとたのしくれ吹かせに

なひく稲葉の雲をのこして

秋野 よろしく候、

末とふきのへのちとせの初秋に

まつ声たてゝ松虫やなく

可然候、

まハき原はや初はなの咲そめぬ

しかの音さそへのへの秋風

秋のきて千くさも、草咲花の

かきりもしらぬむさしの、原

秋田　　よろしく候、

菊ハまつひとまちなから千束にも

あまるいなはの秋そゆたけき

田家秋寒　　右おなし、

小山田のかりほの真萩移ひて

稲葉いろつく風そ身にしむ

冬部

山初冬　　よろしく候、

あさまたきしくる、空の立田山

よはにや冬のこへてきぬらん

暁落葉　　可然候、

影のこる月ハくもらて吹かせに

木葉しくる、有明の山

寒草霜　　よろしく候、

明るよのかれの、あらしさえく、

朝霜なからなひく冬草

朝寒声　　右おなし、

江のなミハ氷る朝けにしもかれの

芦の葉さやく風の寒けさ

氷　　めて度よく出来候、

落滝つ水のしら浪とちはて、

氷もぬのをさらすとそみる

よろしく候、

しもかれの芦のよをへてとちそふる

氷に池の浪もさハかす

桃源亭の山家にて　　よろしく候、

いさり火も木の間にみえて島千とり

海とふからぬ山にこそきけ

浦千鳥　　尤二候、

わかのうらに心をよせて住千とり

いかてかひある跡ととめまし

可然候、

うき妻の行急いつくと夕浪に

鳴く千鳥の浦つとふらん

泊千鳥　　可然候、

こゑたえすことゝひわたれうら千鳥

幾よもおなし浪の浮ねに

鷹狩 おもしろく候、

犬かひの鳥ふミたつ(衍カ)つる夕かりに

つかれの鷹もまたいさむ也

霰 おもしろく候、

今朝はまつあられひとむらうち散て

雪けの雲に山風そ吹

聞霰 よろしく候、

きゝなれし夜半のしくれにふりかはる

板屋の霰音そはけしき

屋上霰 右おなし、

まきの屋のよハの霰ハたまくらに

ふるこゝ地して夢そくたくる

雪 可然候、

降つもるミきりの雪のあけほのに

雲本のま、こるミねを思ひこそやれ

待雪 おもしろく候、

天つかせさそひはしめていつよりか

雲のかよひちふる雪ハミン

炭竈 右おなし、

煙立山よりたかき齡まで

炭うる翁猶かよふらし

歳暮 よろしく候、

としくるゝやまさくら戸の今宵とて

明なハ花の春を待ミン

山家歳暮 右おなし、

春をまついそきもあらぬ山住ハ

としのくれ行けふもしつつき

冬山 右をなし、

正木散かせの霰のふりそひて

外山も冬のふかきをやる

恋部

忍恋 よろしく候、

いとはれぬうき身となれば人まにも

忍ふ思ひをもらしかねぬる

通書恋 右をなし、

かきやにもつたなき筆の跡と見て

浮身を人や猶いとふらん

忘恋 右をなし、

あたになど忘はてけんかはらしと

行末かけしなかの契りを

絶恋 可然候、

わすられすしとふハあやな名残なく

絶てとしふる中の契りを

恨絶恋 よろしく候、

人ハなとつらくたえけんくすかつら

露かゝれとハ恨さりしを

よくきこえ候、

おもはすよたゝひとふしの恨をハ

かことになして絶むものトハ

寄月別恋 可然候、

わかれちの月かきくらす涙ゆへ

うしや見送るかけもはなれぬ

寄橋恋 よろしく候、

独ねハいかにあかさなかさゝきの

わたせるはしのなかき霜よを

寄花恋 二句かけ三句かよふにつ
ゝき候へハ難にあらず

さくらかり木陰を置てはなのもとに

みそめし人の行急をそ思ふ

寄泪恋 よろしく候、

わか袖になかれそいつる泪川

人の浮世を水上にして

雑部

山館雨 よろしく候、

松かせもしつまるよはの山かけに

雨の音聞庵そさひしき

故郷草 右おなし、

露のミややとりとるらん故郷の

まかきハやまとしける草はに

沢鶴 可然候、

すむかけを霜とみきはの芦田鶴や

更て野沢の月になくらん

松遊年友 右おなし、

かけなれて友なふまつのさかへ行

千よハ六十ののちにかそへむ

(朱書「マ、」)

眺望 可然候、

さきの行田面の末に一村の

河浪しろくむかふやまもと

旅 右おなし、

野ちの露うらハのなみにしほれきぬ

うき旅衣日数重て

旅泊 よろしく候、

梶まくらあこの船ちもいかにそと

心をくたく浪かせのこゑ

旅泊浪 右同し、

よせかへるあら磯浪のうきまくら

心やすめてねんかたもなし

山家送年 可然候、

としへつゝよにはいてしと住人や

うこかぬやまを心なるらん

田家鳥 おもしろく候、

早苗とる賤に馴てやこのころハ

かとのさきのたちもさハかぬ

述懐 よろしく候、

おもへたゝよろつのミちも君を仰き

親につかふる外にやハある

尤二候、

つたなくて老はてぬ身にならふなと

わか子孫の末をこそおもへ

可然候、

治れるみよにあはすは武士の

文まなふへきいとまあらしな

よろしく候、

四十あまりはや過はてぬいかにして

行末なく君につかへん

尤二候、

春の花秋の紅葉にそめきても

心こと葉の色そまさらん

冬述懐 よろしく候、

まなふ身にいつか待ミんとしふかく

まとのミゆきのつもる光を

思往事 感吟申候、

跡とめて身にこそしのへたらちねの

ありしそのよの庭の教を

寄道祝　よろしく候、

今も猶神代へたてすさかへ行

出雲ハ雲の道そかしこき

旅祝言　よろしく候、

むまやちそいとゝ賑ふ旅人の

ゆきゝもやすく治れる世は

賀　　右をなし、

月影もちとせの秋をちきりてや

ことぶき祝ふ宿にすむらん

寛政三年亥五月道中にて詠

中将君帰国の御供にて五月朔日江戸をたちける

に、

こゑたえす駒かすみえていはふらし

行末いはふ君かかとして

人々に別を告て、

旅ハうきならひなからも日数へて

なれしやとりの名残をそ思ふ

鶴か岡に詣てゝ、

千世かけて宮ゐしめつゝ鶴か岡

神もうこかぬ国まもるらし

田子のうらのほとりにて三年君にしたかひてこ

のところを過けることを思ひて、

行帰りミとせに三度ふしのねを

仰くも君か恵也けり

小夜の中やまを越けるに、去年ハ病おもくて、

おもひきや命たえすもたとりきてさやの中山け

ふこえんとハと口すさミしことのおもひ出られ

て、

うき身よに猶なからへて立帰り

また越けりな小夜の中山

鈴鹿山をこえける朝ほとゝきすの鳴ければ、

よるの雨のはるゝ朝けにふりいてゝ、

鳴やすゝかのやまほとゝきす

八橋のほとりを過けるに、をとゝしの夏ハいと

まありて旧跡に立よりしに、杜若のをもしろか

りしことを思ひいてられて、

いにしへの跡を尋てかきつはた

ミしも三年をはやへたてぬる

東雲の比瀬田を過けるに雨はれければ、

明るよのミつ海とふく雨はれて

ひらの高ねに雲そかゝれる

都にのほりて大内の有さまをよそなから見て、

新らしき大宮つくり仰みる

ミやこ八千世もふりせざるらん

雨いたくふりひえのやまもはれすなん有しかは、

五月雨はあつまのやまのおもかけに

都のふしも雲そはるけん

師の卿の御もとへ参りけるに、此道のかきしま

きものなど御手つから給ひければ、

身にあまる恵のふミのまきくを

せはき袖にハいかゝつゝまん

忠岑形となつけし硯に盃をそへてたまひけるも

よに有かたき御恵になん、

水くきにかきなかつともつきせしな

すゝりの海のかき恵ハ

旅宿にかへりて人々に酒すゝめて、

はかりなく波かはしつゝ恵ある

君千世ませと祝ふさかつき

日ふる雨に淀川水まして難波にくたるへき船

もかよはさりしかはふしミにとゝまりて、

月影も幾世かはれぬ呉竹の

ふしミのさとの五月雨の空

住吉にもふてゝ、

ことの葉の道まもるてふ住吉の

神をハ分てたのむとをしれ

江の浪もきゝしにこゆる住吉の

うらのみるめそよにたくひなき

広田の社にて、

うき身をもすてすまもれるわきてこの

恵ひろたの神をたのまん

芦屋の里にて雨の降ければ、

くるゝよのあまのたくひのかけもミス

芦屋の里の雨に成る空

湊川の辺りなる楠正成の塚を見て、

君かためいのちをすてし武士の

そのいさほしそ世々に名高き

須磨を過けるに雨のふりければ、

すまのうらの雨やむかしにさすらへし

人の泪の名残なるらん

山里の垣ねになてしこの咲るを見て、

やま賤の心ありてやなてしこの

花をミきりに生したてけん

八幡に詣ける夢を見て、

またもきて仰かさらめや男山

神と君との恵ミたえすは

賤のうちつれて伊勢に詣るを見て、

いかはかり袖つとふらんもろ人の

あゆミをはこふ伊勢の神垣

猿田彦の尊の社にて、

あつまちの君かゆき、もやすかれと

さるたのミこと猶まもらなん

去年秋東にをもむきける時前田持暁、よろこひ

のつもらんことも八千種のはなを分行むさしの、

旅ときこえけるをおもひいて、

武蔵の、花分見てもかへるさの

袖八色なき浮身おそをもふ

君 御館に入せ給ひける日よめる、

錦きて君立帰るよろこひを

待えてミつの国を賑ふ

よミをきける歌奉るへきよしはからずも君命有

しかは、

かしこしな和かのうらはの玉ならぬ

もくつもひろふ君か恵は

みそなはしたまひ猶かしこき仰ことありしをう

け給りて、

おもひきや花もましらぬことのはに

恵の露のかゝるへしとは

二度歌奉りけるとき、

かきなかく浪のもくつのくちやらて

又かゝる世にあふそうれしき

とりくよく

とゝのひ

めてたく候、

資枝

寛政九年 久邦公御供にてよめる

春伊勢にふたゝひ詣てけるとき宮川の水を結びて、

袖のうへにふたゝひかけてあさからぬ

めくミをあふく宮川の浪

よろしく候、

はやく詣しは八月の末なりければ、木々の梢の

やゝうつろひぬるもさかりなる花におもひいて

られぬ、

神路山たえぬ恵ミを身にそしる

ことしハ木々の花を分ミて

春雨しきりにふりければ、

神路山めくミあまねき春雨に

四方の梢の色そそひ行

可然候、

行まゝに河きしのさくら盛なり、

色ふかき花の錦のかけミえて

みもすそ川の名こそしるけれ

神前に一本の花のさかり成を見て、

やまさくら神の御前のひともとハ

よにたくひなき色に咲らし

おなしとき音羽山の花を見て、

音は山をとにきゝこし花をけふ

関のこなたにとひきてそ見る

双林寺にまかりて(西行カ)西上人の墳のほとりに古木の

さくらの咲たりしを、

朽のこるさくらや花の木かけにと

ねかひし人の形見成らん

それより長楽寺にゆきけるに四方の桜の盛なる

さまいはんかたなし、山たかミ都の春をとなか

めしふることもおもひいてゝ、

一村のかすミも花にうつろひて

都にさらす錦とそみる

猶こゝかしこ都の花を見侍りて、

みつゝこしやまの桜のたくひかは

花の都の木々の盛りは

伏見の桃をよめる、

ミちとせに万代そへて呉竹の

ふしミのさとの桃ハ咲らし

花の比あらしやまにまかりて、

ことの葉もあらしのやまの花盛

みしとも人にいかゝかたらん

花盛よしのもかくやあらし山

たきなミかけてかほる春風

いかたしを見て、

心あれや花かけとめて大井川

はなにさほさす春の筏士

寛政十一年

桃源と号たまひし吉野々山家に植たてし桜桃紅

葉を詠、

よろしく候、

仙人にとものふ道を身にしらは

幾千代もゝのかけ馴てミむ

秋 よろしく候、

浅茅原つゆもこほれて秋きぬと

夕日かくれに初かせそ吹

右同し、

四十へて我身ふり行うき秋の

夕の露そ袖にあまれる

おもしろく候、

あきかせにゆふるるミねのしら雲も

たえてくまなくいつる月かけ

寛政九年春於武蔵詠御点取三吟

冬 よろしく候、

雲かせも秋にかはりて神無月

まなくしくるゝ里そ寒けき

可然候、

友千鳥かすそふあとは八百日ゆく

浜のまさこと共につきせし

雑 おもしろく候、

明るよの関路こえきて朝付日

にほてる影にうちいての涙

寛政七江府旅舎におひて無題百首

秋 よろしく候、

明らけき神代のまゝの秋つすに

すむ久かたの月そくもらむ

冬 可然候、

かせさそふ音羽のやまのみちはを

せきいれて落す滝そ色こき

雑 よろしく候、

いかに猶うれしからましたらちねの

あるよにかゝる恵ミしりなは

各々よくとゝのひて候、

此度の百首もやすらかにて

宜候、
も

寛政十三年無題百首のうち早卒五日間詠之、

春二十首

言のはもまさきのかつらくる春の

めくミにいとゝさかへゆくらし

あま人もはるやしるらん海神の

かさしの波のかすむみるめに

子日せしのへのまつかけとめきつゝ

若葉つむ身も祝ふ万代

うくひすのたかきにうつる道ハ猶

春にあひてもしらぬ身そうき

ふるさとゝ誰とはさらん梅柳

さほのうちなる春の色かに

しはし猶こまつなきてやわか草を

我もすさめむ森の下かけ

折はやす人めまれなる山さとハ

さハラひもゆる春もさひしき

半天におつるともなきゆふひはり

あそふいともてつなくとやミン

ふるすとふつはめをミても春の雁

をのかとこよにいそき立らん

春雨の明日さえふらはけふまでに

またるゝ花やさかすやハあらん

みし春を猶わすれぬもまたたくひ

あらしのやまの花の面影

旅衣いつのはるか行て又

都の花のかけに馴なん

いかにして袖にもとめむ宮人の

ことはの花のかせの匂ひを

棹姫のわかよの春に咲く花を

さそふかせ(宋書「マ、レ」)になとまかすらん

色ふかく藤山吹のさき匂ふ

花に見はたす池そはへある

雲に入とりもしはしハやすらひて

春の名残の音もなかなん

夏十五首

桜麻の名にもたかひて夏衣

けさのたもとハ花の香もせす

榊はにけふハあふひをとりそへて

かものうち人神まつらし

いろことにわかはさしそふ楓には

なつも心をそめすやハある

おそ桜匂える花に声の色も

つゝまてもらせやまほとゝきす

まつに猶ものおもへとやほとゝきす

雲のはたてに音信もせぬ

ほとゝきすおのか五月は雨雲の

よそにもかくやふりはへて鳴

たちはなのさける軒ははかりふきし

あやめもわかすかほる夕風

ふりそへハわさ田の早苗とる賤の

ゆきゝもたゆる岡の五月雨

山ざとに庵りむすひて夏草の

ことしけきよをいつかのかれん

中川のやとりにみしも遣水に

てらす蛍もおもひやられて

さしくたす浪の鵜舟の篝火を

夜河の鮎はうきせとやミン

すむかけも露のまにして明ゆくや

小笹か原のみしかよの月

くるゝ日ははしるの袖のいつくにか

あつさ吹やるのきの下風

秋二十首

つゝ井つゝいつのよゝりか散そめて

桐の一葉の秋をミすらん

よろしく候、

ほし合のあまのかはらは猶のこる

あつさもなみの秋かせや吹

身に入ハいかなる色そときはなる

軒はの松の秋の初かせ

のちとをく露分ミつゝ咲花の

千くさの色も袖にうつさん

吹しける野分のあと名残うき

声をたつへき萩のはもなし

咲花をおのかためなる錦とや

しかたちなるゝのへの萩はら

都人さかのゝ秋のむしの音を

今もみきりにはなちてやきく

人やりの玉章かけていきうしと

おもはぬ雁やわたる一つら

ひとふるす里もいとぬ深草の

秋をうつらや床しめてなく

秋かせの山田のなる子吹からに

さく小鳥の声もひまなき

夕つゝのくもらぬそらにさやかなる

ひかりならふる秋のみか月

いてゝ入山はかれと待おしむ

こゝろつくしハおなし月影

幾浦をミあつむるとも澄影の

あかしの月脱之いかにて及はん

武蔵のゝ露分衣みし月の

秋も五とせミやへたてけり

かけ更ぬよはひもかくと詠れは

月に思ひの露そこほるゝ

かせさむき岡へのさとハ葛のはの

うらミをそへて衣うつ也

ひとゝせの花の名残とみる菊ハ

しも置庭にうつらさらなん

山ちかミ住かひなれやよとなから

ミねのもみち葉めつる朝夕

日をへすやもろく散なんそめぬるも

あたるなる秋の露のもち葉〔朱書〕「マ、」

行秋の名残とけふは夕霧の

かせになひくもしたひてそ見る

冬十五首

冬来ぬとまつ折くふる柴人や

今朝やまさとに煙立らん

くるとあくとまなくしくれて神無月

日影も月もさためなきそら

もみち葉の山かけにして唐錦

たつた姫もやたちかへり見ん

ふゆかるゝ人めハいわし山ざとに

はなミる草ののこらましかハ

つま妻になくや千とりハいさり火の

こかるゝ影もつらしとそ見ん

ひとむらのをしねもみえずかれる田に

さゆる霜夜の月のくまなき

白妙のしも置まよふ冬のよハ

ゆふ告とりの声もさむけし

ふゆふかミ氷をたゝむ柚川の

いはまのいさりいかてくたさん

幾度かさそふあらしにふるも猶

霰ミそれハつもるともなき

よろしく候、

けふも猶雪はさそハて飛鳥風

たゝいたつらにさえくらす空

まなふ身にいつかはしらんとしふかく

まとの白雪つもる光を

埋火をねさめの友とかきをこし

馴ゆく冬もあまたへにけり

よろしく候、

冬なからかつさくむめによろこひの

猶色そはん春をこそまで

恋十五首

しらせはや思ひいるのゝ初尾花

なひく契りをまたきたのむと

恋すてふうき名もらすな涙川

せくに月日ハよしなかるとも

うけひかぬ人のつらさに池水の

いひいてゝ猶袖そぬれそふ

いつまでかいきの松原いきてよに

かはらぬ色のつれなさもみん

つらさのミいかてミゆらん夢ちまて

人ハゆるさぬ契りならしを

あふことはたえてなきよのならひをも

きかぬ計と身のたのミなる

はかなくや思ひかけなん玉すたれ

ミしすきかけは誰としらぬを

よろしく候、

恋をのミ賤かしけむとうちはへて

くるしくものをおもふとし月

打解てあひミるよはゝくたかけの

またきになかぬ声としも哉

あはてこしいくよにたえて別ちの

道のをさゝの露を分見ん

あたなれやむすふ契りも露のまに

うつるこゝろの月草の花

恋すまの浪にしほれてあま衣

つらきうらミを猶やかさねん

雑

よをこめてせきちにきゝし鳥のねは

夢かと今のねさめにぞ思ふ

みよしのゝ花より分て立田山

秋のにしきも分みてし哉

沖つ風吹はよりきて薩摩かた

ミなどにつなく船そかすそふ

かり衣さき立人をしるへにて

ゆりはのやまの道もまとハし

(朱書「く、」)
行末猶いかにもしらぬ日の

つくしの名こそわか身也けれ

尤二候、

呉竹のかけにならひて直かれと

子の生先をおもふ明くれ

のかれすむ山もおもハてすへ遠く

ミちしあるよに猶つかへミン

ことの葉の色かもあらぬよもきふの

住かハ誰か問きても見ん

ほと／＼をおもひしりなはおほせなき

身のねかひある人ハあらしな

まつしきをいとふとハなき心にも

とめるを見てハうらやまれぬ

とをつ親もこけのししたにやうしと見ん

かく人なミにたちおとる身を

尤二候、

ひとすちに思ひ立ぬることのはの

道に心の末とをらなん

よをまもり人をすくはんちかひこそ

神もほとけもひとつなるらめ

月花にくむさかつきも浅からぬ

恵ミある世をあつく春秋

あめかせもときしるみよに打なひき

いと、うるほふ四方の民草

終功めてたく候、 枝

山住春

谷山純香

去年の秋よりをもく煩ひていくへくもあらざり

しに、あらたまのとしたちかへり、も、鳥のさ

へつる春にもなりしかは、いさ、かをこたるこ、

ちして、む月もすきぬいてや、桃源亭にまかり

てしつかに花も待見は、かゝるうさのなくさむ

こともやと、いまたよもきふのかとさしいつへ

くもあらざりしを、二月二日はかり俄に思ひた

ちてはるかなる岩のかけちをしのきからふたと

りつきぬ、よののとけさにもす花はなを枝に

こもりてやまかせはけしく吹やまで、雨さへ降

いてしかハ、

山里はまた風さむくふる雨に

さきいてん花ハイそくともなき

うへたて、かけしむる庵の花ながら

さくを心にえこそまかせぬ

こよひもまつかせ颯々ときこえたり、

吹おとはしつけき夜の雨ならぬ

いほりのあらし夢もむすはず

三日、けふは天晴て日影のとか也、

雨はれていつる日影の木々に今朝

にほふも花をいそくとやミン

おもしろく候、

枝に今朝かすそふはなのつほミかと

雨の名残の雫をそ見る

鶯をきゝて、

うくひすの木つたふこゑの匂ひをハ

いつより花にそへてきかまし

山かけにひとむらくもるをミれは畠焼けふりな

り、昨日けふのほとならずは今もよきてとこそ

いはめ、

こゝろありてはたやく賤や片山の

花さかんまと煙たつらん

たよりにつけて尚超・親位のもとへ、

ひかりなき谷にしられぬ恵ミある

よにはとて花^(マ)やめつらん

やまさくら咲ぬときかは駒なへて

庵ののきはの花もとはなん

かへし、 親位

ことの葉のミちのめくミの露ふかき

やまよりやまつ花も咲らん

さきそめはとハんと思ふやま里の

花の盛りはすこさすも哉

尚超

やまさとの軒はのさくら咲ぬとも

ことはの花にいかて及はん

〕とはぬとも思ひこそやれ山住の

庵の軒はの花の梢を

四日、やまかせの音さえかへりゐれと、おし明

る松の戸の遠かたはさすかに霞わたれり、

あらしふくやまはくもらぬこのまより

みゆる海辺のかすむ曙

白き梅は散かたなるに紅梅のひととき咲出しをミ

て、

くれなひの色は桜も及はしと

こゝろをそめてめつる梅かえ

またやなきを、

山さとの垣ねの柳まゆひらく

春の恵ミを賤本のまゝも仰かん

先祖の牌前にたてまつれとまたつほミのさくら
を家なるものゝ方へつかはすとて、

無人の手向と折は桜花

咲あへぬ枝に露ぞ散ける

おもはずになきよの人に手向する

花の春までなからへんとは

わらはへのほとより父母にしたかひて此所に折

ふしあそひしこともおもひいてられぬ、

たらちねのミしよの春のことゝはん

かけも老木の残る桜に

父母のミるよならねは庭桜

わか植そへし花もかひなき

ミし人の無影それもしのふとや

さくらの木のめ露むすふらん

五日、朝けのそらくもりなきに一木のさくらけ

ふそはしめて咲そめぬ、

やまゝとの明る梢にめつらしく

はつ花みえてかほる春かせ

やまにてはけふと初はな世にハとく

咲てミはやす色や古ぬる

いそきこしはななきにけり今よりは

問くる人やまつことにせん

桃もむらゝさきたり、

色ふかくもゝもけさよりさく花を

庭の桜にならへてそみる

杖にすかりてたちいつる外面に賤のめのかたミ

もたるあり、よりてミるに草もちるにすとて蓬

を摘にそありける、曾祢好忠の詠せし風情も思

ひいてられて、

古畠に今ははるへともへ渡る

みとりのよもき賤そつむ哉

六日、よへより雨ふりけふもはれず、こゝち例

ならされハかせにあたらしと柴のあミ戸さしこ

もるも本意なしや、

いたつきのミにしあらすハたちぬれて

雨に咲そふ花も見ましを

はつきくらを尚としにをくるとて、

さきそむるこのひと枝の花をミよ

そふることはの花ハなくとも

かへし、

浅からぬ心の色も手折こす

このひと枝の花にこそミれ

七日、雲はれて山々は霞ぬれと庭の苔地霜ミえ

てきゝすはるかになく、

野をかけてかすめるやまのほのくくと

明る朝けにきゝす鳴也

霜朝のはるのきゝすもよるの鶴の

たくひに鳴て子を思ふらし

忠厚主の御もとへ花を奉りけるにそへて、

やまさくら此初花に咲そひて

盛の折は君も問みよ

風はけしければけふもまたさしこもりぬ、よる

になりていもねられず、

吹かせもミにしむ霜のさむしろに

とけてねぬよハ春としもなし

八日、けふも空くもりてのとならぬに花は咲

まさるともみえず、忠厚主よりきのふの御返し

あり、

浅からぬことはの露に色もかも

猶そひけりな花のひと枝

とふくともよしのゝやまちこの比に

分てそ問はん花の盛りを

御使をまたせてとりあへず、

とりくの君かことはの色かには

ミやまのさくらいかて及はむ

清宗主のもとよりひとふさの花にそへて、

みせはやなミなみの谷に咲そむる

花を手折て送る一枝

よもやまのはなに心のなくさまは

身のいたつきも何かのこらぬ

といひをくられしかは、

かけしめてめつる心も色ふかき

南の谷の花そ世にぬ

身のうさも忘れてそミることのはの

花とりそへて送る桜に

申の刻はかりに道平とひきたりぬ、このほど山
賤のたよりなくてハこととふ人もあらざりしに
めつらしく情ありておほゆ、みちすからの花も
いまたきことにさきあへすとかたるにそ、かゝ
るミやまさくらはいとゝをそきもことはりなり
や、盛りのころハかならずと契りて暮かゝるほ
とにたちかへりぬ、今宵ね覚の床に螺の声たえ
すぎこゆ、明るは旧式の御符あるよしかねてき
こえしかは、よの程より勢子をあつむるとて吹
ならし、

武士の野やまのかりもをさまれる

みよをまもりの道そかしこき

九日、時ならぬ西吹かせに雨そほふり、朝日花
くもりてしくるゝ空に似たり、やゝ雨ははれぬ
れとあらし吹まさりて柴の袖垣こゝかしこたふ
れ、ときはなる木葉も散ミたれて野分たつけし
き也、されとことしけきよを得ることをあらそ
ふ市人のいとまなきにくらへてハいかゝゝ、

咲そめてまなくやちらん桜花

さえかへり吹山のあらしに

毎もあしたのまはふたかりしむねもしはらくあ
くこゝちして、やまゝよりみわたさるゝにま
た病のきり立そひてかきこもりつゝ夕月のをか
しきより盛りちかつく影もミすまして、風のさ
はきにハまくらをたくへくもあらぬそわひし、
(朱書「マ、」)
やまかせのさむきよとこに春のきか
(朱書「マ、」)

霞の衣いかてからまし

十日、雨雲の名残なれとかせは猶寒し、され
といたくふかされは朝床に起るて詠るに、むら
ゝなる梢のはなは手を折ていくらともかそへ
つへし、

かつさける初花見てもやま桜

木々の盛りハ猶またれけり

柴折くふる煙のこゝろほそくうちなひくに霞を
たのむといえるそ思ひいてらる、
かせさむきミやまのさとの朝かすミ
煙のすゑにたちもつゝかす

十一日、天くもりて春さむきに花は村消の雪か
とまとひ谷の鶯ほのかにきこゆ、
やまさむミ霧にむせひてのとか成

よのはるしらぬ鶯やなく

とうちうめくにやかてミきりの花にうつりきぬ、
洞中栽樹鶴先知といへるに仙人ならぬ身にハこ
れをこそともなひてきかまほし、
つるならぬ谷の鶯まつしりて

植しのきはの花をとふらし

四方のこすゑ打かすミ、やゝふりいつる雨に庭
の桜もさきそひぬれは、松の戸ほそちもやら
てめかれすそみる、織月何絵唯暮雨と管土の賦〔朱書〕マ、一
したまひしにつきて野語をつゝるもかたはらい
たきわさ也、

佐保姫屋努類々毛伊走寿降雨濃

糸母亭波名濃錦遠留羅舞

十二日、朝のほと空くもりて昨日におなし、ミ
やこの花は三月をときとさくめるを、爰にはい
つも二月をすきす、三百里をへたてぬれはかく

季候もかはるなるへし、ことしハこそその日数を
さへそへて春のたちしかは盛りもかねていそか
れしに、このころの余寒にやま井のつとむすふ
はかりなれば、花のしたひもとけかたきにやあ
らぬ、

身のうさもなくさむはかり山桜

はや咲そひて盛みせん

いとつらしやとつふやきるるに、かせ吹かはり
て桜島の燃煙うちなひき砂灰ふりくるそ雨より
もうるさし、

十三日、此二日三日ハ風にさへあてられぬれは
朝るかち成しに、けふはのとかなる日影にもえ
はたる草はのいろもゆかしく、藜杖をたのミに
たちいてぬれと、もとより身つかれぬれはとふ
くも行やらす、とある芝生におりてつはな・
早蕨あさるも伯夷か首陽におなしきや、されと
こゝろさしハことなるへし、

つはなぬきさわはらひ折もこの国を

しめぬる君か恵とそ思ふ

またやまかせ吹いつるにいそきかへりてかきつ
めし松の落葉もて葉をそにる、けふもひねもす
谷の音きこゆるは柄をくたせしによるへくもあ
らて、さこそくるしきわさならぬ、

いとまなく薪こるをは春の日も

のとけさしらぬ心なるらし

十四日、けふもまつかせの声すさまじきに心ゆ
くへきかたもなければ、三首の題をまふけて早
懷をのふ、病中の麓詠一のとるへきなし、これ
をつたなき筆のしるすものくるをしけれハ、
もらしつ枕をとりてこしかたをおもひつゝくる
に、身まつしくて伊勢のをの淵にもあらぬとい
ひしにならひしかは、此十年あまりうきよをし
のひて紫のゆかりなるもとにあやし草の戸を
引むすひぬれと、ひさをいるへくもあらず、ま
してはな咲草木植るへきところもなけれハ、を
のつからはるしらぬ身にそありけらし、せめて
ハやまさとのしつかなる花にましりすミれつミ、
心のうさもはすられてつかふる道にもとたちか

へりなんとおもひいひめるに、ことの外なるミ
ねのあらしのあけくれ寒ければ、くるしさもい
やまさりしてかきこもりつゝ月花も心にまかせ
ぬそわひし、世をすてゝやまに人人やまにても
猶うきときハいつち行らんといへるそ思ひあは
せらる、けに行へきかたなきそわりなきや、
苔のしたのつみのやとりもいかならん

身にそふうさハ山もへたてす

十五日、天晴てかせしつか也、師卿此亭を桃源
と号たまひ、桃・桜・紅葉の和歌をたまひぬ、
その御歌、

屋万比免濃寿美か越東へは母濃い者努

波名能志多加気美知者有気利

世越与所尔須美都久本罷盤以久千毛登

佐喜楚婦佐久羅花楚古勢努

紅葉の御詠はここにをさめぬれはこゝにもらし
つ、これを床にかけて拝吟す、感賞にたえずみ
たり鄙詞をつゝるもかの驥尾につくとやいはん、
君も猶みちよとひミよやま人の

すみかにたえぬもゝの下道

はる幾よ君かことはの花をこの

庵のさくらにそへてめてまし

日影暖成に首をめぐらせは、その梢としらさり
しも所々にあらはれ、遠のやまくうすくこく
かすめるもいと艶世、忠厚主の山荘桜尾ハ西の
かたに目路はるかなれと、さかりなる木々の色
まかふへくもあらず、松杉のこのまにミゆ、
よそにかくめつるとしりて桜尾の

霞も花をたちやへたてぬ

かく嘯さるるに、清雄・盛明の二人柴の戸をたゝ
きてさし入しそめつらかなりしに、ほとなく貞
長・貞輝・道庭うちつれてきたり、盛香もとひ
よりて庵のうち所せきも花のめいほく世や、
あるしまふけにさかなもとむとこゆるきのいそ
くものからかゝるすミかに何かあらん、人々の
たつさへしをてうしくさかつきさし出ぬれと、
主つゆものまされは酔をすゝむる客もあらざる
こそいと興なきこゝちすれハ、題をさくりてを

のく花にこゝろさしをいふことにそなりぬ、

けふハ山姫も世の人のことはの花をめつらめこ
とおほければみなもらしつ、やかてねくらにか
へる鳥のねにさそはれてたちわかれぬ、けさの
ほと世にいてし山賤のもてかへりし文とものな
かに南溪の名あるをひらきミれは、病もをこた
りにやなどかひつらねておくに十首の歌あり、
くりかへしよむに山下水の浅からぬあはれしる
こともおふければ、これをた空目にやはとまた例
の腰折をになひいたすによも更ぬへし、

十六日、けふも晴たり、尚超入来、閑談興あり、
雅情つきせぬものからはるかなるやまちのけは
しければ、くれぬほとにとたちわかれ、ひとり
夕の花をみる、けふは西上人西行カのむかしをたれか
しのはさらん、されハかのことの葉をあまたた
(朱書「マ、」
ひ花の
(朱書「マ、」
もとにすして、

けふといへはそのきさらきのことの葉を

花になかめてしのふいにしへ

いにし春一日伏見の駅より洛東にあそひて双林寺に詣しに、上人の墳のほとりにふりぬるさくらさきたるをミて、

朽のこる桜やはなのこかけにと

ねかひし人の形見なるらん

とよミけるも、はや五年をへたてぬるよとおも

ひつゝくるに、やゝくれそひて朧々たる春の月

桃花のはやしにうつろふ、

しのはるゝむかしをとへハものいはぬ

花の梢にかすむ月かけ

例のねさめにまとをひらけは、よひのまのかす

ミもはれて月光の光りあひたる、さなから雪の

よのこゝちしていはんかたなし、

このころの月の盛りを契りてや

ひかりをかはず花の咲らん

十七日、天晴ぬ、元衛ぬしより文のたよりあり、

このほどやまのさくらををくりしをめつらしく

もてはやしぬるなど詠(朱書「マ、」)したまりしことのはそい

ろぶかくみゆ、ミつからもあまりのさむさにな

やましくてかたミおこたることをねんすとあれは、

思ひやれ花のおりにもさしこもる

山さくらとのいたつきの身を

なをくふへきものゝうへまでもこまかにさたし

たまひしこそ謝すへきことのはもなく筆もさ

しをかれぬ、愚子純贄けふもきたりしに、道平

をひきてこのほど武おくろの花見にまかりしな

と聞ゆ、其折の歌あまたかひつけしをみるにそ

よの春もしられて、

恵ミあるミそのゝ花はみる人の

ことはのふかき色かそひけり

十八日、空晴たり、きのふハつねよりなやまし

うしけるをミすくさてすミきよもとゝまりぬれ

は、諸共に明ほのゝ花をみる、やまのはも空も

ひとつにかすミわたりしも、さしのほるひかけ

にはれて四方の花いとゝ明らか也、かけしむる

やまのさくらハあまたならねと、よそなる谷の

梢にさきつゝ、きしをミなわかものかほにそみえ

る、ミやまもけふは艶陽桃李のはるなれや、其
外の遊原かすミの袖にくりかけていくらとなく
紅錦をさらすは、たちぬはぬきぬきる人のため
かとみえて桃源のおもかけなるへし、けに心あ
るひとにミせまほしきさま也、

仙人のかすミなりせはさくもゝの

(朱書)マ、
おりにはれもやせぬ

など口すさむに、久蔵ぬきたりたまり清雄・道

平扈従す、かゝるやまふかきすミかを花につけ

てもとひたまはんことはゆめあるへくもおもは

さりしときこゆるに、去年の春義宣ぬしなとと

もなひきたりしハ三月のはしめにてや有けん、

折しも雨ふりかせあららかに吹て花も雪と散ミ

たれしを、けふは桃もさくらも盛りのほどにて

本意とけしと(朱書)マ、
とのやかにかうちかたらひて、

さく比と問ひきて見れはこの庵の

客
主のきはをうつむ花のしら雪

山住のとはるゝ春はものいはぬ

花もうれしと思はさらめや

道平・清雄ハ一日ならずとひきぬれは、
たちかへり分こし人の心をは

やまのさくらも浅くやハミン

人々の歌あまたあれともらしつ、後にしるすへ
し、やゝ春の日もかたふきぬれはいまハとてた
ちわかれぬるに、そかのしはしとなかん鳥のね
もかなといひし花やまのふることそうちうめつ
る、

十九日、日よく晴ぬるに花のかけをそとふ、病
足つかるれはあをやかなる草の莖に連ふすもこゝ
ろゆかすやハある、風ゆるやかにうち吹て笛鼓
のきこゆるにしりぬ、このふもと大磯ハ

国君のミそ有て、勝絶の地に花の木ともあまた
上中下のへたてなくうらゝなる浜辺につとひる
る、袖口の色つやくろき巖・白きまきこにはへ
あひ、けさきやかによそひたる波路の舟いくら
ともなくこきつらね、羽觴をとほして春風に酔
をすゝめ、管絃乱舞の声花のもとにたえさるも
ゆたかなるミ代のしるしなるへし、人しれぬや

ますミはたゝ花よりほかにと打なかめて、
しる人のありともかくてやま桜

馴ぬるはなをあはれとそミン

とひとりこちてむかゝるに日は山のあなたに
入ぬ、

廿日、空くもりぬれと雨ハふらす、かせも吹あ
へぬに梢の花をつからうつろひていつしか三
か一ハ散りそめぬ、まつにハつらく日数へぬる
をいかてかふさかりの程なかるらんかし、人の
こゝろのうつるもしらぬみやまにハ、さくらの
ことくちるものハあらしとそおもほゆれ、

吹かせのつらさもいはてあなたにかく

うつろふ花ハ心とやちる

本田親位はなのごろかならずと契しに、さわる
ことありてえとはすなんとなをとしのもとより
(朱書「マ、コカ」)
きかへしかは、散かたの花につけてちかのりに
送る、

やま桜としにまれなる人まつと

けふまで花ののこりしを見よ

こよひ雨しめやかにふり慮山の昔もおもひやら
れてうちもねられねは、稽古のため雨中落花と
いふことをよめる、

さくら花錦さらすと見もあへす

降春雨にしほれてそちる

与新左良波喜盈那天仁本え布類安女濃

耳者尔嘉寿楚婦半名濃志寵愛端

廿一日、雨はれて花ハ庭ハ庭前に散しけり、
(朱書「マ、」)

明てけさミきりの花に夜の雨の

ふりそふ音ハきこえさりしを

南溪のもとより、

南谷花ハちれともきた山ハ

いまをさかりの色かなるらし

きたやまの道とをければさく花の

盛りときけととひもやられす

きた山をしむるあるしや春ことに

ことはの花のかすつもるらん

かへし、

のとかなる南の谷にさき匂ふ

花は久しき盛りなるらめ

かせさむききたなるやまハ待にをそく

咲ハはやくも花ぞ散ける

北南花のところをへたつれハ

かたミにとはぬうらミこそあれ

夕陽斜なるに谷のこすゑハなをさかりにそミゆる、あらしにもしられすやありけん、

入日さす谷の戸にミる夕はへの

花ハよそよりふかき色なる

昨日盛取〔朱書「マ」〕のもとへたよりにつけて花を送りける

にかへしあり、

けふみむとおもひかけきやくゝろさし

ふかくも送るミやま桜を

さひしさも無なわすれてミやまへの

春に桜の花をめつらん

吟賞するにふと鐘の声きこゆ、ふもとのこかけ

ははや入相にこそなりつらめ、

廿二日、けふものとかなる日影に花のちるをみ

ては、しつこゝろなくとかこちやまかせ吹、い

つれはそらにしらぬ雪と賞して、

さえかへり吹とはなしに散る花の

雪をそさそふ春のやま風

昼ますくほとふりまさる花のふゝきに袖打はら

ひて柴の戸に入くるあり、いそきむかへみれば

貞長・貞輝の好子也、ありし一日より情ふかく

おほえて何くれとかたたらひて、

貞長

やま里にちとせをへつゝミむ花は

この春はかりちるもおしまし

貞輝

とりくゝの色そえならぬ桃さくら

盛あらそふ春の山さど

純香

けふそしる花のしら雪ふミ分て

とひこし人のふかき心を

むらゝにのこれもあれは、

花もけに心ありてやけふこゝに

とはるゝまてと散のこりけん

純賀

散のこるミやま桜の花なくは

とひこし人に何をミせまし

おほくもらしつ、江戸の御使つきて人々のふも
ともミやこよりも音信ありしを純賀もちきたり
しも、いそかはしければひらきぬれとよくもみ
さりしを、しつかなる灯のもとにとりいて、ま
つ師の卿の御もとよりの文箱をあくるに、鶯入
新年語といふ御懐紙にそへて月次御会の題をた
まふ、みつからの家にも執行せよとなり、御懐
紙は正月の題也、又去年の暮・ことし元日の御
詠もあり、たてまつりし詠筆に御合点の巻々も
くりかへしミて、かゝる御めくミのかたしけな
きに思ひつゝけ侍る、

浅からぬ露のめくミをことのはの

さかゆくミちは千世も仰かん

廿三日、明ほのゝ花あらしの空の雪とふりて京
極黄門の名歌いとゝ骨髓徹有明の月をミて、

行かたや月もまとはんさくら花

散かひくもるあり明のそら(朱書ニマ)

また庭の落花を、

やまかけの苔地をうつむ花ハたゝ

跡ものこらぬ雪のしろ妙

明日は江戸江の御使あれは常善のもとへ遣しけ
る返書のおくに、

武蔵のゝ春にあふ人かきりなく

よもに咲そふ花をめつらし

廿四日、打かすむミとりの空もうらゝなるに、
木々のこすゑもいつしか青葉にうつりて、垣ね
にしけきやま吹の八重なるはをそく、一重なる
はとくさきたり、つゝし・藤なミもいつはかり
にかハと心にかけすやはある、
やま吹にたちもをくれす咲そへよ

いはねのつゝし松の藤浪

このあたりは鹿おふくて、賤のおか春秋にたね
まきし麦・粟やふのもの、かりあけぬさきにお
のれくひつくすめれば、煙をたて鳴子引きまゝく
と追やるも馴ぬれハたちもさらす、けふも二三

花をふみて木かけをすく、

散花をおしか也せはねにたてゝ

なくへきものを秋ならずとも

廿五日、明行空ふかくかすみてのとか也、予と

し久しく天満宮を信仰のこゝろさし有て、月々

廿五日にハかならず奉樂の和歌を詠す、けふは

ことさら二月なれば折からの題によりて、

華

咲匂ふ花につけてもかせふかぬ

ミよをや神(朱書「マ、」のまもるらん

午の刻はかり迎の駕籠をもたせて愚子兄弟きた

れり、花も散ぬればとくかへりね、久しくくす

しともまミへねは藥のしるしもおほつかなく、

里よりはあらしはけしくそゝろさむきもよから

ぬにとさまく／＼にきこえつゝ、身にいたつきの

いるもしらすてなとつふやくにそ、けにものを

もてあそへは心さしをうしのふとかや、今ハ人々

のこゝろにまかせてと思ひとるにも猶木のもと

の名残つきせねは、

華もしれ咲をまつよりかけ問て

馴(朱書「マ、」しもきかあかぬこゝろを

とひそかに寿してたちいつるに、また咲あへぬ

一木の桜有、外の散なん後にと契りしをいかに

おもふらんとかくるゝまでかへりミかちなり、

とりく

雅情面白候、

あ

十九日 晴天、

一朝六ツ過起、四ツ時出勤、八ツ後御暇、帰懸白尾氏

刀差替之科差越、暮過帰宅、夜ル七ツ時臥ス、

廿日 晴、

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、四ツ過御暇、七ツ過より

鐘場へ出張、出席人数拾貳人、暮引入、夜八ツ時臥

ス、

廿一日 大風雨、

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、赤松家・倉山・碓山家へ暇乞二差越、帰懸升形へも参り、七ツ過帰宅、大鐘時分より鐘場へ出張、暮引入、夜八ツ時分臥ス、

廿二日 朝立雨、四ツ前より霽、

一 暁大鐘起、朝六ツ前より出勤、今日者 大守斉興公御立、殊ニ琉人被召連鹿府中之賑々さ天地も崩候哉と被驚候計也、四ツ時御立、御立前二者角之御蔵脇へ 大守様御立有之、御城下御覧有之、五日跡より田舎之者共男女之入込夥敷、新橋其外目も舞候程也、八ツ後御暇、七ツ後より前屋敷へ弓射ニ参り、夜四ツ前帰宅、直ニ臥ス、

廿三日 晴天、

一朝六ツ半起、四ツ時出勤、八ツ後御暇、七ツ後より鐘場へ出張、暮引入、夜八ツ時臥ス、

廿四日 快晴、

一朝六ツ過起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、暮より父上様御方江罷出、四ツ半時分御暇、九ツ過臥ス、

廿五日 快晴、

一朝六ツ半起、四ツ時出勤、八ツ後御暇、帰掛町田監物殿江御役替祝儀ニ参り、帰懸升形へ一刻立寄、七ツ前帰宅、七ツ後より鐘場江出張、暮引入、夫より左近允新七殿・辻元弥兵衛入来、九ツ時被帰候、九ツ半時分臥ス、

廿六日 晴、

一朝六ツ時分起、四ツ前出勤、四ツ後御暇、七ツ半時分より鐘場江出張、暮引入、夫より父上様御方へ罷出候へハ藤島氏・三原氏杯罷出被居候、四ツ半時分御暇ニ而直ニ臥ス、

廿七日 昼小雨、後晴天、夜二人大雷雨、

一朝とく起、四ツ前出勤、八ツ後御暇、七ツ後より鐘場江出張いたし候得者十七人出張有之、各々暮引入、

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん 東京大学
顧問 史料編纂所所長 榎原雅治

国立歴史民俗博物館前館長 宮地正人

鹿児島大学名誉教授 五味克夫

九州大学名誉教授 安藤保

委員 原口泉 晋藤哲哉

三木靖 日限正守

宮下満郎 塩満郁夫

堂満幸子

鹿児島県歴史資料センター黎明館

館長 高山大作

副館長 松山美朗

調査史料室長 内倉昭文

学芸専門員 崎山健文

資料調査員 梶ヶ山梨沙

編集員 中野尚子

堀田未希 村山麻美

鹿児島県史料

三史時代越名

平成25年3月1日発行

非売品

編集 鹿児島県歴史資料センター黎明館

発行 鹿児島県

印刷所 凸版印刷株式会社